
異世界ハーレム彼女の逆襲！

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界ハーレム彼女の逆襲！

【NZコード】

N3797Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

あまりにも凶悪なその目つきのせいで女性に嫌われる主人公、春樹。

そんな彼が召喚された異世界を救い、その報酬として神に要求したものが

「自分を嫌い、避ける全ての女性が自分を好きになる」といつ『ハーレム機能』であつた。

現実世界に帰った主人公は、その凄まじいまでの性能を誇る

『ハーレム機能』のおかげで、我が世の春を謳歌するのだが……。

山田春樹のハーレム事情

「人を外見で判断してはいけません」

小学校の頃、誰もが一度は先生に言われた言葉だろう。あの頃、純粋無垢だった俺はこの言葉を信じ、そして裏切られた。

こうして朝の身だしなみを整えるため、鏡の前に立つたびに抉り出される俺のトラウマ。

数少ない（というかほとんど唯一と言つてよい）友人であり幼馴染でもある、美鈴が俺に向けて言つた我が人生最悪の褒め言葉。

『晴樹つてさー、『容疑者A』の写真が一番かっこよく写るよねー!』

……きっと美鈴本人は、必死に俺のいいところを探そうとしていたんだろう。そうに違いない。そう信じたい。生まれつき目つきの悪い俺は、何も知らずに見れば人の一人や二人簡単に殺してそうだ。その怖さは毎朝鏡を見るたびに俺が俺にビビるくらいすごい。

身長体重、共に標準。運動神経だって頭の出来だって顔だって決して悪くない。そんな俺に彼女どころか友人一人出来ないのは、ひとえにこのハンパなく悪い目つきと、それにより幼少時から虐げられてきたせいですっかり歪んでしまった性格のせいなのだ。

あえて断言しよう。

人とは、外見が全てなのである。

だがしかし。二日前から俺の世界は変わった。

ぼっちだった三日前までの俺よ。さようなら！ 俺は、俺だけは

あんたのこと、嫌いじゃなかつたぜ！

こんなにちはりア充な俺。これから張り付くだけよひじくなー。

「さて、今日も俺のハーレムな一日が始まるぜー。」

……異世界、というものを知っているだろうか？

パラレルワールド、平行世界。呼び方は様々だが要はこの世とは違う世界の事である。

そんな世界に俺が呼び出されたのは三日前の昼休み。近づいてくるクリスマスの話題をする隣の席の女子たちに気を利かせ、トイレの個室に立てこもった時のことである。別にこの子たちを避けたわけじゃない。プライベートな予定に聞き耳立てるのはマナー違反だという紳士な俺の判断からである。…………『やつぱり雪が降るイヴに真剣な眼差しで見つめられたら覚悟しちゃうよね！』といつ声に俺のトラウマが刺激されたからでは断じてない。…………けつ。俺に真剣な眼差しで見つめられたら命と直操を失う覚悟をするくせによ。

いやまあ、俺の事はどうでもいい。

本題は、余鈴を聞きトイレのドアを開けたらそこが異世界だったといふことだ。

思わず呆然とする俺に、その世界の神を自認するおつわさんは言った。

「異世界の子よ。貴様に力を『えよう』この世界を救つてくれ」

正直、「やった！」と思つたね。

この世の全ての女性から（大多数の男性からも、なのだが、この際男なんてどうでもいい）嫌われていた俺にはこの世界に絶望しかなかつたからだ。このまま、あと十五年ほど経過したら危うく剣も魔法もない魔物もいないこの現実世界で立派な魔法使いになつてしまつところだつた。

RPGとSLGと凜子攻略はぼっちの嗜み。俺は、過去にやりこんだゲームの知識から思いつく限りのありとあらゆるチート性能を自称神に要求し、その全てを身に付けた。

もちろん、一番大事な『ハーレム機能』もばっちりだ。

じつして万全の準備を整え、お姫様や女戦士や無口ながらも俺に好意を寄せる女魔法使いや女性神官や幼女に化ける俺にだけ懐く魔物などを従えた俺は。

なんと一日で魔王軍を壊滅させてしまったのである。しかも自分の力に依らずに。

最大の功績者は人ではなく、もちろん魔物でもなく、現実世界で流行つていた『風邪』であった。この世界の魔物たちは、偶然風邪気味だった俺のもたらしたウイルスにひとたまりもなく敗れ、次々と勝手に倒れていったのである。

余りの事に呆然とする俺を尻目に、僅かな側近に守られた手負いの魔王を追う王国軍。

やがてその首が獲られ、この世界に平和が戻った時、俺は滂沱の涙を流した。

「一日！ たつたの一曰である。

これでは、ツンデレお姫様が俺に『テレる時間も、普段は勝ち気な女戦士がベッドでは人が変わったように甘えん坊になる時間も、我が家を犠牲にして無口な魔法使いを守り抜いた俺に彼女がそっと寄り添つてくる時間も、貞淑な女神官がその経典に逆らい教会で俺に貞操を捧げる時間も、ネコ耳尻尾付きの魔物つ娘（娘と書いて『こ』と読む）とちよつとHなキャツキヤウフフをする時間も、全くなかつたのだ！」

言葉もなく涙する俺を見て、なにを勘違いしたのか神は言った。

「この世界の平和の為に泣いてくれるとは……。よし。本来ならば在り得ぬことだが特例として認めよう。元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに与えた能力を持つたまま帰ることを許そ。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まっている。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のこと好きで好きでたまらなくなるよじこじしてくれ！」

……ハーレムの王、山田晴樹の朝は早い。

「やつぱり朝のこのひと時は大事ですね。これから出会つ様々な女性とのスムーズな会話のためにもTV、新聞、ネットでの情報収集は欠かせませんよ」

思わずナレーション風に言いつてしまつたが、より良いハーレム生活の為には努力も必要なのだ。……嘘です。本当はもっと深刻な理由があります。

さて。今日も一日がんばるか。

母親の作ってくれた朝食を平らげ、俺はマンションのドアを開ける。

どん。

「きやつ」

外に出た俺に、『食パンを咥え走ってきたかわいい女の子（笑）』
がぶつかってくる。

「おつと失礼。お怪我はありませんか？　さあ、手を貸すぞ」「は、はい……ぱつ」

顔を赤く染めつつ、そつと手を差し出すその女の子。二日前の俺
がやれば、手ではなく財布が、「こ、これで許してください……」
とこう言葉と共に差し出されるといふだ。

名残惜しげなその子と別れ、エレベーターに乗り込む俺。同乗するのは〇〇風お姉さん。

ガタン。

「きやつ」

「おや? 停電のようですね。エレベーターが止まっています

「そ、そんな……暗くて、怖い……」

「だいじょうぶ。俺がついてます。さあ、手を握つてあげましょつ

「あ、ありがとつ……。大きくて、安心する手……ほつ

もう放さないとばかりに力強く握りしめられる手。三田前の俺が
やれば、エレベーターの管理会社の前に警察に連絡されるところだ。

名残惜しげなそのお姉さんと別れ、学校へ向け歩き出す俺。田の
前を歩くのはなぜかふらふらしている清楚な女子。

ふりつ。

「きやつ」

「危ない!」

「あ、すいません……。ちょっと貧血気味で……」

「俺が支えなければ車道に出てしまつといろでしたよ。思わず抱き
しまいましたが、苦しくはありませんか?」

「あ、ありがとつ、ござります、平氣です……。男性に抱きかかえ
られるのは、生まれて初めてです……ほつ」

なぜか俺の胸にのの字を書き始める女子。三田前の俺がやれば、
そのか細い指ではなくスタンガンとかそういう防犯アイテムが胸
に突きつけられるところだ。

名残惜しげなその清楚な女子と別れ、また歩き出す俺。やがて見
えてきたのは……

「なんだ。美鈴か」

「朝っぱらからなんだとは失礼ね……。はい。昨日の分」

怒りつつ、大きな紙袋を差し出す我が幼馴染、椎葉美鈴。つすい茶色の髪を活動的なショートカットにした、やや釣り目がちの大きな瞳が印象的なこの女とは、幼い頃、何とお医者さん「ひっこ」をしたほどの仲。……例えそれが「俺患者さん。美鈴歯医者さん」という変則的お医者さん「ひっこ」だったとしても、だ。……ぐらついでいた乳歯を「ひっこ」引き抜かれた時の恐怖と痛みは一生モノのトラウマその二だ。

「内訳説明するよ。ラブレター十一通。手作りのお菓子が四つ。同じく手作りのお弁当が二つ。味はひとつはまあまあ。もうひとつは火加減が甘い。あとついでに私宛の『晴樹様に近づくな』という趣旨の脅迫文が一通。殺害予告が三通。」の四つは「のまま警察に持つていくね」

……脅迫文より殺害予告のほうが多いことに、女子の想いの闇の深さを感じる。

いやそんなことより。

「なんで勝手に食つてるんだよ弁当。それ俺宛のだろ?」

「だつて二つも食べられないでしょ?だから適当に私が減らしておいてあげたの。……だいたいさ、最近の晴樹はおかしい。処構わず誰かれ構わずフラグたてまくるの、いい加減にやめなさい。一緒にいる私に迷惑がかかるから」

「そう思つからこそ、こんな早い、あんまり人がいない時間に登校してるんじゃないか」

「それでこれなの? ちょっとあんたおかしいんじゃない? 主に

田つ毛と性格が

「田は関係ないだろ? 田は。泣くぞ?」

「性格のまつは否定しないんだ……」

……そうなのだ。神の力はやはり偉大で、今の俺は歩くフラグ製造機。登校するだけでこの始末だ。……ちなみにこいつ、幼馴染の美鈴にはチート能力が適用されない。俺の願いが『俺を嫌い、そして避ける全ての女性が』であつたためと思われる。なんだかんだいつてコイツ、美鈴は俺を嫌つてはいないようだ。好意があるかどうかはともかく。あと田の事は言つたな。悲しくなるから。

「……だいたい、なんでみんな私をメッセンジャーにするのよ。こんななのどにがいいのか知らないけど、気持ち伝えるなら直接言えばいいのに!」

「誰もがお前みたいな鉄の心を持つていると限らないだろ?」

…『ああ、愛しの晴樹様に気持ちを伝えたい。でも振られたらどうしよう?』ってなるのが乙女心といつものなんじやないか?』

「最近の調査によるとそういう『乙女』は一十年ほど前に絶滅したらしいわよ」

まじかよけやんと保護しようと国一 イリオモテヤマネコより貴重だらうが乙女!

「それに俺だつて別に処構わずフラグ立てるわけじゃねーよ。…つと、お嬢さん、なんで泣いているんだい? ああ風船が木に引っ掛けてしまったんだね。……ほらこれた。もうなくしちゃだめだよ」

「ありがとうおこにちちゃん! みずき、おおきくなつたらおこにちやんのおよめせんになつてあげるね!」

「……そうね」

「俺だつて最初の彼女は理想通りの人を選びたいからな。誰かれ構わざなんてとんでもない。……もしもしそこのお婆ちゃん。そんな大荷物持つたまま歩道を渡るのは危ないですよ。持ちましょ。：へえ、曾孫さんの顔を見に？ お婆ちゃんに似てきつと可愛らしいお嬢さんなんでしょうね」

「ありがとうよ、若いの……。あたしがあと七十歳若ければのう……」

「……理想が高っことはこことだわ」

「だろ？」

「もういいわ。なんだか疲れた……。早く学校行こ。……あ、小鳥ちゃんおはよー」

嫌みのように俺に向かい溜息をついた後、別人のように爽やかな笑顔で挨拶をする美鈴。おい。たまにでいいから俺にもその笑顔を向けるよ。減るもんじゃねーだろ。

「あ、あ、おはようございます。美鈴さんと……山田くん」

小さな声で挨拶を返してくる小柄な少女。前髪を切り揃えたセミロング？ ヒドも言えぱいにのだろうか？ その表情は田を覗すように伸びられた髪のせいによく見えない。

「おはよー小鳥ちゃん。いつも早いねえ」

「そ、そんなことない、です。……あ、先、行きますね」

ペーペー。そんな感じで軽く会釈すると、小走りで行つてしまつ彼女。

「……小動物みたいな子だな。知りあい？」

「ええ。私のクラスメイト」

僕と美鈴は腐れ縁とも言つべきか同じクラスになることが多い。ちなみに今年も例年通り同じクラス、姫神学園高等部1年C組だつたりする。

「……いやまあ、ほら。俺、クラスの女子とあんまり口きかないし……」

「……昨日の調理実習での課題のクッキーを、クラスのほぼ全ての女子から貰つた人の発言とは思えないのだけど?」

「お前くれなかつただろ」

「だから『ほぼ』つて言った」

「じゃあ、きっとあの子もくれなかつたんだよ」

「最後尾に並んでたわよ。小鳥ちゃん。……ちょっと大人しいけど、いい子だよ。小鳥遊小鳥ちゃん」

「いい子かどうかはこの際おいておくとして、その名前の付け方はどうかと思う。親の顔が見たいってこういう時に使う言葉なのか?」字面を見れば韻を踏んでると言えないこともないが、手抜きにも程があると思うぞ小鳥遊両親。俺が市役所の戸籍係だつたら赤ペンで添削して突つ返すところだ。

「ま、名前は本人の責任じゃないからね。……晴樹。長い付き合いに免じて警告しておくけど、ああいう大人しい子ほど思い詰めたらすんごいんだからね。下手に手出しさしないほうがいいわよ」

「了解。……とりあえず早く教室行こうぜ。これ以上フラグ立てたら身が持たないからな」

「……この時、俺はもう少し考えてみるべきだったのだ。

小鳥遊 小鳥。たかなし ことり。

この大人しそうな子が、三日前に変わった俺の人生を、もう一度
変えることになる。

山田春樹のハーレム事情（後書き）

はじめまして。キタキツネと申します。

普段、割とよく人が死ぬようなものばかりを書いているので
たまにお気楽に、ゆるいものを、と思い勢いで書いてみました。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

小鳥遊 小鳥

「……やれやれ。すっかり遅くなつちまつた」放課後。田直の仕事で遅くなつた俺は、人気のない廊下を教室を目指して急ぐ。

『晴樹君との田直』は今のクラスの女子にとつては一種のステータスになるくらいの幸運らしく、黒板を消そうとして手が触れ合づ、ゴミ出しに行って折からの突風でスカートがギリギリまでまくれ上がり、「……みた？」と上田づかいで言われる 黒だつた。 気合入りすぎだらう。山口さん などなど、フラグのオンパレードを積み重ね、ようやく担任の待つ職員室に日誌を提出するところまで行つたのだ。が。

そこで我らが担任、菊池先生（一十七歳。独身。大人の色氣むんむん）と山口さんとの間で女の戦いが勃発。「日誌の内容に關して山田君に確認することがあるわ。個人的に」と俺だけを引きとめようとする菊池先生と、「いつしょにお家に帰るまでが田直です！」とこう遠足と混同しているらしい山口さんによる舌戦はお互い一步も引かず、どういう流れでか「では実技によつて決着をつけましょう」という先生の挑発に「先生が失つた若さと言うものを見せ付けてあげます！」と山口さんが言い返しつつスカートのホックに手をかけたあたりで男性教師による物言いが入り、ようやく俺は解放された。

ありがとう日本史の田中先生。あんたの授業、脱線した雑談と豆知識が多いけど俺は嫌いじゃないよ。もしタイムトラベルとかして過去に行つたら役に立つかもしれないし。

菊池先生と山口さんによる「実技対決」を見てみたい気持ちもちらんあつたが、それよりも俺にとつては夕方六時から再放送されているアニメのほうが重要だった。……『ハーレム機能』によりアルでの女性との関係は大幅に改善されたとはいえ、二次元の女子を愛する気持ちも失わない俺である。今日は青と赤の名シーンだ。見逃せないぜ。

逸る気持ちをそのままに、恐らく無人であろうと予想した教室のドアを勢いよく開ける俺。意外なことにその日に映ったのは、窓から差し込む西日に佇む一人の地味な女子生徒。

「あつ……」

小鳥遊さんだった。

「おひ。 小鳥遊さんか。 もう遅いぞ？ ビリした？」
「あ、あの……山田くんを、待つてました……」

〇へ。 素晴らしき『ハーレム機能』。この地味めな彼女にもしつかりその力は働いていたと見える。だがしかし。

「本当にすまん。 小鳥遊さん。 今日は俺、どうしても外せない用事があつて……」
ひとりぼっちは、さびしいからな。俺が見てやらなきゃいけないんだよ。 テレビ。

「あ、あの、わ、私、山田くんが、山田くんのことが前から……」「あれ？ 聞いてた俺の話？ 俺、今から大事な用事が」
彼女の様子を窺う。……あ、だめだこれ。ものすごくテンパって

る。震えるその小さな手はスカートの端をぎゅっと握りしめ、俯いたその顔は過度の緊張に赤くこわばり、多分、俺の声なんて一切届いていない。参ったなあ。

確かにアニメは予約録画している。でもな、リアルタイムで見ながら実況板に書き込むあの一体感がいいんだよ。俺たちぼっちは多くの同志たちと気持ちを一体にして感動を分かち合つことが出来る唯一の時間。それは何より貴重なもので、本物のBBS戦士と自負する俺としてはやはりここは話を切り上げて。

「め、迷惑かとは思つたけど……でも、言わないで後悔するよりはいいかなって！」

そう言って自分を奮い立たせるように勢いよく顔を上げた小鳥遊さん。その拍子にトレードマークのように目にかかるついた長い前髪がさらりと顔の横に流れ、その潤んだ大きな瞳が見える。……あれ？ 意外なほど整つた顔？ というかちょっと幼い感じだけど、この子、前髪上げたらすいじく可愛くね？

「…………わかったよ小鳥遊さん。話を聞くよ」

「山田くん…………ありがとう。で、でも、気持ち落ち着けますから、ちょっとだけ待つてください」

すまん全国のBBS戦士たちよ。俺はちよつと遅れる。が、必ず参戦する。具体的にはオープニング後のCM中には行けると思う。だからほんのちょっとだけ戦線を支えてくれ。今日も勢いTO Pテン入り目指して頑張ろう。

すう～～はあ～～と数回深呼吸してから、やがて落ち着いたのか小鳥遊がついに言つ。

「……私、山田くんのことが、好きです。……良かつたら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします」

……正直、すげえときめいた。外見的にも相当可愛い（しかも普段隠しているところが高ポイント）な小鳥遊さんが、その白い肌をうつすらと赤く染めながら、潤んだ瞳に少しだけ涙を浮かべつつ上目づかいで告白してきたこの光景こそは、俺が何度も夢見て、そして諦めていたものだった。でも。

「…………ごめん。小鳥遊さん。今の俺は、特定の彼女を作る気がないんだ。だから、ごめん」

「あつ」

そう言つて謝りつつ、俺は後ろ手に教室のドアに手をかける。そうなのだ。夢の『ハーレム機能』を手に入れた俺にとって、全人類のほぼ半数がそのターゲット。今の俺は選ぶ方の立場。小鳥遊さんが悪いという訳ではない。むしろ今現在においては彼女候補の筆頭と言つてもいい。でも、選択肢は多いに越したことはない。

まだ慌てる時間じゃない。諦めたらそこで試合終了なのだ。

100%理想の彼女を手に入れるその日まで、俺は、戦う。

「……じゃ、俺はこれで。ほんと、ごめんね」

がり。……ぬるん。びしゃ。

背後の小鳥遊さんに謝罪の意味を込めた眼差しを送りつつ、でも確かな拒絶の意志を見せるために教室のドアを開け廊下に出ようとした俺を、何かぬらぬらしたモノが押し戻した。

「じゃ、触手！？」
「えええええっ！ なんでドア一杯に触手が蠢いてるんだよー？」

思わず尻もちをついた俺は慌てて左右を見回し、ベランダ伝いに隣の教室から脱出するというプランを選択。猛ダッシュで西口差し込む窓へとりつく。

「ぐつ！ ま、窓も、開かない、だと……。」

「あ、あの、無駄、だと思こます。『歴史固定』、しつぢつてます、かり……」

恥ずかしそうな声でそんな厨二っぽい単語を並べるのは、小鳥遊さん。

『時空固定』……異世界に行つた時に無口な魔法使い子から聞いたことがある。簡単に言つと時を止める魔法だとか何とか。……そのまま窓から外を見る。確かにさつきから差し込む西日は一切の角度を変えず、テニス部が打ちあげたボールは空中で止まつてゐる。この寒いのに下半身のみコニフォーム姿の女子のアンダースローともめぐれ上がつたままだ。……あれはE組の武田さんか。いい脚している。やはり女性の価値は胸だけではなく脚にあると言つていひだろ。ぜひ一度対戦（してじつくり鑑賞）してみたいものである……じゃなく！

「な、ななな、なんだと…？ 魔法！？ 魔法だつて…？」
「は、はい。ちなみにその子は『触手結界』魔法の『うね子』さん、
です

やう言つて小鳥遊さんが描きした先は先程の触手ドア。うね子さんとやらが挨拶するやうにうねつねしてくる。その動きに合わせてすこし勢いで俺のUAZ値が削られていぐ。

あまりのことに呆然とする僕。それを不思議そうに見つめる小鳥遊さん。

「あ、あの… 時間がないといつて…」したので氣をきかせてみたのですが…。余計なお世話でしたか？」

あー。そうか。時間が止まつてゐるのならオープニングに間にあつね。よかったです。

「…………いやいやいや。落ちつけ俺。あの、小鳥遊さん？ 魔法だつて？」

「はい。魔法です。山田くん、あいつを見たことなかつたんですか？」

『時空固定』

なんだと…？

「あ、あいつ… って、小鳥遊さん。まさか…」

「はい。私も、山田くんと同じで、『あの世界』に呼ばれて、帰ってきたんです。ただ私は、神様じゃなく魔王さんのまつに呼ばれた側でしたけど……」

「そうか！ 神様に呼ばれた俺がいるんだ。
ないという保証はない。魔王側が同じことをし

「つ、つまり、小鳥遊さんは向こうの世界で俺に倒された魔王の仲間だったと……。え、も、もしかして魔王を倒された復讐で俺を殺すなど!?」

ちょっととまつてくれ！ 今の俺は戦闘能力皆無だぞ！？ そもそも風邪ウイルスのせいで俺、向こうでも一切戦闘なんかしてないし！ このクラスの魔法使いに襲われたら俺なんか秒殺だぞ！

「へっ？ 復讐？ そんなこと考えていませんよ？」 そもそも魔王さん、生きてますし

ちょっと待つて。魔王軍が魔王の首獲ってきたの見たぞ俺「

「あれは魔王さんが用意した人形、ダニーです。……魔王さんは、確かに他の魔物さんたちと違つて死ぬことこそなかつたけど、でも衰弱したのは事実でしたから。……今は国王軍に見つかっていな隠れ家でじつと体力の回復を図つてゐるはずです」

「なんてこった……」

くそつー、それならそうと言えよ魔王！　それ知つてればもう少し向こうに滞在して、姫や女戦士や女神官や女魔法使いや女獣つ娘との時間を堪能してきたのに！

「わ、私、ですね。魔王さんの側近として勇者のパーティを迎え撃とうとして、気がついたんです。勇者が、山田くんだったことに.....。春から、入学式からずっと気になつてた山田くんが、私が呼び出された世界にいる.....これって運命なんぢやないかな、って」

俺の動揺をよそに、夢見るように語り始める小鳥遊さん。
……………そ

の、はにかむような表情と、背後のドアから見え隠れする触手の『ラボレーション』がえらくシユールだ。

「……そして、一日で魔王軍を壊滅させた山田くんが、敵であるはずの私たちのために涙を流すのを見て、確信しました。『ああ。私は山田くんの、敵にすら同情して泣いてくれるこの優しさを好きになつたんだ』って……」

勘違いですそれ。ハーレム計画が駄目になつたと思つて泣いてただけです俺。っていうかどういつも俺の涙を深読みし過ぎだ。もつと考えろ。頭使え。

あとね、その気持ち 자체も多分、自分自身のものじゃないから。それ俺の能力だから。

異世界にいた俺には、と言つか今でもだけど、『ハーレム機能』がついてるからさ、俺の事を見ただけで女の子は無条件で俺の事を好きになっちゃうんだよ。

「だから、思い切つて魔王さんに話したんです。全てを。そうしたら魔王さん、私の気持ちに同情してくれて、この世界に帰してくれたんですね。……向こうで身に付けた、魔法の力を全てそのまま、で

なんてことしてくれやがる魔王！　ってか贋腫だろそれ！　俺は『ハーレム機能』だけだつたぞ！

「……そんな魔王さんの気持ちに応えるためにも、私、勇気出しました。……ずっと隠しているつもりだった気持ちを打ち明けようど。勇気がなくて、三日もかかっちゃつたし、実は昨日、ちょっとズルして調剤した『惚れ薬』入りのクッキーも渡してみたのですけど、効果、なかつたみたいです。……やっぱり勇者様の力はすご

いですね

控え目ながらも可愛いラッピングとは裏腹に、もの凄くどす黒い
気配を感じるクッキーがあったのはお前のだつたのかよ！ 何となく嫌な予感がして食わなくてよかつたよ！

「だから、今度はもう一度。ちゃんと自分の口で言こまか。……好き、です」

「いや。小鳥遊さん。気持せつけられしこたび、わざわざ言つたよう

に

ピキン！

そんな効果音を出しつつ、教室の床、壁、そして天井までが一瞬で凍りつく。

これは『絶対零度』の魔法！？

別名『エターナルフォースドブリザード』！？ 僕は死ぬ！？

「う、ごめんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくつて……。か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃつて……！」

……『テット オア アライブ』ならぬ『テット オア ラブ』か……しゃれにもならねえよそんなの。……俺は必死に、生き残る術を考える。

「小鳥遊、さん」

「は、はい！」

「『』めん。今は彼女作る気になれないって言つのは本当なんだ。それに俺たち出会ったばかりでしょ？」

「あ、あの、一応クラスメイトになつてハケ月ほどたつてます、けど……」

間違えた。

「し、親しくはなつてないって意味ね！……だから、その、と、友達からとこづことではどうだらう？」「お、お友達、からですか？」

「そう。友達。俺、友達少ないからさ、入づきあいとか苦手なんだ。だから、その、い、いきなり彼女とかだと困るけど、まずは、友達からつてことなら、いいかなあって」

正確には『少ない』のではなく『いな』のだが、この際そういう細かいことはどうでもいい。……それ認めると悲しくて涙が出てやうしな。

俺の起死回生の一言。俯いてその言葉を瞞みしめるよつて聞いていた小鳥遊さんが、やがて、顔を上げて言つ。

「わかりました。私、がんばります。こつぱー、こつぱーこつぱーくじて、いつか山田くんに認められるがんばります。よ、よろしく、へ、お願いします！」

「わかりました。私、がんばります。こつぱー、こつぱーこつぱー笑顔は直視できないほど眩しくて、俺は危うく本気でこの子に惚れてしまつところだった。……が。

「だ、だから。浮氣は、だめ、ですよ。山田へ……ううん。晴樹く

ん！…………あ、あの、私の事は『小鳥』って呼んでください、ね

…」

……………いつて俺の夢のハーレム計画が崩壊する」となった。

異世界ハーレム彼女の逆襲によつて。

小鳥遊 小鳥（後書き）

ご意見、感想などを受けたらうれしいです。

一級フラグ建築士 VS 隼のフラグフレイカー

異世界。

そこは俺にとって夢のハーレムであった。

豪奢な椅子にふんぞり返った俺は、さて今日はどの娘とナニして遊ぼうかと、周囲に侍るたおやかな女性たちを見回す。俺を見上げるその瞳はうつとりと濡れ、「さあ私を選んで！ そして食べて！」言っているようで、この中から一人を選ぶという作業がまた、楽しくも心苦しい。

迷いに迷いつつやがて一人を選んだ俺が、『そうか。別に一人じゃなくともいいじゃん。よしこの際あと二、三人……』と他の娘たちも物色し始めたその時、轟音と共に雷が落ち、天から一人の小柄な人物が舞い降りる。その表情は長い前髪に隠れ、見ることが出来ない。

その人物が、小さな口から呪詛の言葉を紡ぎだす。

「晴樹くん……。浮気はダメって言いましたよね……」

ひとつ、ひとつ、ひとつと軽い足音を立てて近づいてくるその人物。彼女が軽く左右に手を振るだけで、俺の命よりも大事なハーレム要員たちが一人、また一人と声もなく消えていく。

「や、やめろ……近づくな……」

やがてその悪魔は俺の前に立ち、その綺麗な前髪をかき上げつつ
言つのだ。

「浮氣者の晴樹へんこひな、お・し・お・せ・です。……少しこ、痛いですか、ひな」

「小鳥遊いいい！－！」

がばつ！

「正解、正解、正解、正解……。」ミラ。空、静か……。

俺はベッドの上で息を整え、冷や汗を拭う。

三日前、いや、もう四日前か。異世界から『ハーレム機能』を持ち帰り、生まれ変わった気持ちでこの世界を満喫していた俺の前に現れた悪魔、いや魔王の使い。

その名も小鳥遊小鳥。同じく異世界帰りのクラスメイト。

魔王にもらったチート能力をフルに使って俺に迫りくる彼女の存在に、俺は心の底から怯えていたのだろう。まさか初めて会った俺の主観的に、な(その日から夢にまで出てくるとは思わなかつたぜ……。

『……私、山田くんのことが、好きです。……良かったら、私を、山田くんの彼女さんにしてください。お願ひします』

……昨日のことが思い出させられる。

前髪上げたら実は可愛かったというのは『眼鏡を外したら美人』に通じるものがあり、それだけでご飯三杯はイケる。控え目な態度、鈴を転がすような声。正直言つて小鳥遊は俺の好みにぱっちりあつてはいる。だがしかし。

問題は、ふたつ。

その一。……いくら可愛いとはいえ、チート機能を使ってまで迫つてくるのは反則だと思うのだ。小鳥遊君。告白の為に時間を止める魔法使いなんて聞いたこともねえよ。

その二。……お前がチート機能を持っているようだし、俺も『ハーレム機能』を持っているんだ。俺の夢はハーレムを作り、さらにそこから厳選した最高の彼女を見つけること。その崇高な野望を邪魔すんじゃねえ。

「……って、本人を前にしたら言えないしなあ……」

凄まじい威力の『ハーレム機能』を持つこと以外は、今の俺はただの人。

魔王からその凶悪な魔法の全てを受け継いだ小鳥遊を振つて怒らせてしまつたら……そう考えるだけで身震いがする。

「何とか対策考えねえとなあ……」

頭の中で『脳内ハルキ君』——叩から五年までを呼び出し、対策会議を開きつつ登校しようとマンションのドアを開ける俺であった。

「お、おせよひいざいました！」

囁んでる。ましゅってなんだよましゅって。可憐いじやねーか。

ではなく。

俺は田の前に立つ小柄で伏し田がちな女の子に問い合わせる。

「た、小鳥遊！？ なんでここに！？」

「あ、あの……いつしょに登校したいなあ……って思つて……」

「あ、そ、そ、そ、うなんだ。ハハハ光榮だなあ。でもよく俺んち知つてたね？」

「そ、それは、その、こ、この子が調べてくれました……。探索系使い魔の『ミシル』ちやんです」

きじやあああ……

挨拶のつもりなのだろうか？ 小鳥遊の華奢な肩に止まっていた化け物、外見的にはそうだな。ひょこくらいのエイリアンに悪魔の羽を付けたような感じ？ が、まともに聞いたら石化してしまう。そのまま鳴き声を上げる。

朝っぱらからヘイクイなモノ見せるな。SAN値が下がるわ。

そんな俺の動搖をよそに、その『ミシル』ちゃんとひざの顎を撫でる小鳥遊。

「ありがと。ミシルちゃん。あとでおいしい』はんあげるからね
きしゃああああああーー！」

多分喜んでこらのだろう。ぱつやばつやとその蝙蝠のようない翼をはためかせるミシルちゃんといふ生き物。……にこにこにあげる『おいしい』はん』とやらが一体何のかちょっと気になつたが、それ聞くとSAN値だけではなく食欲までなくなりうるうので黙つていた。

といえず。

「そろそろ行こつか小鳥遊。わ、そのミシルちゃん戻して。田立つから」

「あつ。は、はい」

小声で何かを呟く小鳥遊。その声が終わると、ぽんつといふ音を立ててミシルちゃんが煙に包まれ消える。便利なもんだ。

「よし。じゃあ行くか。……つて、あれ？あの娘は……？」

そう言つて歩き出しかけた俺の視界に、昨日の食パン娘が映る。

反射的に手を挙げて挨拶しようとした俺は妙なことに気がついた。誰かを探すようにさきにさき周囲をうかがう食パン娘の田には、俺が入っていないようなのだ。

やがてちょっとがつかりとした風に肩を落とし、歩き去る食パン娘。

「……なんだ？ おかしいな」

「フラグが立たないなんて。」

「え？ 何か言いましたか？ 晴樹くん？ ……あ、忘れてた」

何かを思い出したように軽く手を振る小鳥遊。その途端、ぱちんという軽い音がして、俺たち……といつかこの一帯を覆っていた透明な膜のようなものが弾ける。

「何だ今のは？ 小鳥遊？」

「えっと、『隠密結界』を解除しました」

「なんでまたそんな物騒な物を？ 誰かに狙われているのか？」

「ゴルゴ三十さんとかに。」

「や。そうじゃなくって……。は、晴樹くんのお家の前で待ってるところ、見られたら恥ずかしいなあ……って思つて……。あ、でも嫌つて意味じゃないですからね」

そういうつむきもじもじしている小鳥遊。その仕草は可愛いけどやつてる」とは意外に大胆というか凶悪。それで今日、新聞届いてなかつたのか。新聞屋すら追い払つたのかよ隠密結界。新聞代返せ小鳥遊。

「ん。……解除したのなら、まあいいや。行こうぜ。エレベーターはまひつちだ」

そう言って今度こそ歩き出した俺。

エレベーターの前で到着を待つのは、昨日のあの「風お姉さん。」にはひとつ、爽やかなさいで更に好感度を上げておくべきだと、俺の中のハーレム魂が告げている。朝から（正確には夢の中

から）続ぐ「タタタ」で引きつり気味の顔を無理に笑顔へと変え、声をかけようとする俺。しかし。

「あ。晴樹くん。エレベーター待たなくとも平氣ですよ。えい
っ」

ヴィン。

「つおつりーな、なんだ！」

一瞬で、五階にいた俺たちは一階のエントランスへと移動する。

「瞬間移動です。便利、ですよね？」

ほめてほめてと言わんばかりに小鳥遊が俺を見上げる。尻尾とかついてたらぶんぶん振り回しそうな勢い。相変わらず小動物系な彼女。名前は鳥類だけど。……ではなく。

「あ、あのな。小鳥遊。便利なのは認める。認めるけどな、こうぽんぽん魔法を使つたら目立つちまうだろ？ 少しは控えようぜ」「あ……。そ、そうですね。」めんなさい……

途端にしゅんとしてしまう彼女。もともと小柄でうつむきがちなこの娘には、こういう表情もよく似合つ。思わずSに目覚めてしまいそうである。しないけどな。女の子は愛るものであつて苛めるものではない。断じて。……いやでも本人が望むのなら別ではないか？ 小鳥遊つて案外Mそつだし……。

先程逃げ出した『脳内ハルキ君』たちが再び集合し、『SMは有りか否か』という全人類にとつて有意義な会議を開き始めてしまつ

たため、不覚にも俺は、Hレベーターから出でた〇〇風お姉さん
に気付くのが遅れた。

あつ……。やう思つた時には件の〇〇風お姉さんは、軽くひびき
田線を送り、小鳥遊とこつしょにいる俺を見てひみつとひびきをつ
に微笑んだまま歩き去つていくところだった。

……まだ。またフラグを立て揃ねた。

絶対の自信を持つ『ハーレム機能』がうまく働かないことに不審
を覚え、立ちぬくし考え込む俺の袖をそつと引っ張る弱々しい力。

「何だ小鳥遊。今ちょっと考え方をだな」

「そ、それ……。その……」、小鳥つて呼んでほしいなあ……って

「ああ」

そう言えば昨日、そんなこと言つてたつけ。んー。でもなあ。

「すまん。小鳥遊。やっぱりその頬みはけよつと聞けないかも
「え……。やっぱり私つて迷惑ですか……」

先程とは比較にならないほど暗い顔。とこづか泣き出す寸前に
すら見えてる。

「違う違う。どうかかっこーとお前が想像する理由とは逆のベクト
ルの理由だよ。……いいじやん。小鳥遊つて名前。俺はそっちの方
がいい」

小鳥も確かに珍しい名前だけど、小鳥遊姓は俺にはつらやましい。
これは全国の『山田』だけではなく『田中』君『鈴木』さんも同

じよつて思つんぢやないかな？ ありふれた姓をもつ俺たちは『小鳥遊』のような個性ある姓名に憧れるのだ。

「『山田』なんかよりよっぽどこい名前だよ。『小鳥遊』。俺は好きだな」

そう言つて歩き始める俺。いい加減急がないと遅刻しちまうわ。

「まあ、『小鳥遊小鳥』って続くと正直どうかとも思つが……。あれ？ 小鳥遊？ おい。なにしてんだ、早く行こうぜっ！」

返事がないことに違和感を覚えふと振り向くと、ヒントランスで固まっている小鳥遊がいた。その顔は限界まで赤く染まり、今にも倒れそう。

「や、『山田』姓より『小鳥遊』姓がいいつて……。そ、それってもしかして婿入りしたいっていう意思表示、ももももしかして、プロポーズでしょうか……？」

「ちげえよ！ バー口ー！ 早く来い！」

「すげーポジティブだなこいつ！ 高校一年生の身分で求婚なんかするか！」

俺は夢見がちなこの少女の手を強引にとり、引きずるようにして歩き出した。

「……やっぱり遅すぎたか。美鈴、行っちゃったなあ

「いつも美鈴さんと登校してるのですか？」

「んー。何しろ保育園以来、十年に渡る習慣だしな。……誤解するなよ？ 腐れ縁つてやつだからな？」

「あ。はい。わかってます。……いい人ですよね。美鈴さん

「そうかあ？」

思いつきり疑問形で言つてみる。いい人は俺に一生モノのトラウマを植えつけたりしないと思うぞ？ しかも複数。

「はい……。私、人見知りだからクラスにも馴染めなかつたのですが、美鈴さんは数少ない友人です。いつも優しくしてくれます」

「そういうもんかねえ……。あっ！？」

それに気がついた俺は無意識に飛び出す。目の前にいるのは昨日の清楚な女の子。昨日と同じようにふらふらと車道に出やうになつてている。

昨日と違つるのは車道のほう。そんな彼女に向かい、一台のトラックが速度を上げて迫つてくる。運転手は携帯片手に通話中のようで、歩道をよろめく彼女に気がついていない。

『危機的状況にある女の子を救つ……一級フラグ発動だ。

でも待て神様よ！ 確かに俺はハーレムが欲しい！ でもそのために女の子が危険な目に合つようじや本末転倒なんだよ！

「くそったれ！ 間にあえ！…」

俺は限界まで腕を伸ばし、その女の子を引き戻そうとする。しかし、その手はむなしく宙を掴むだけで、彼女の身に届かない。

もう一つ俺自身の体をクッショーンにして彼女を救おうと思い、車道に飛び出す覚悟で足に入れた俺の顔の横を、凄まじい突風が吹き抜けた。

「うーーー！」

そのあまりにも強い風力は、よろける女の子をその威力で歩道側に戻し、俺の目の前で展開される予定だつた悲劇は俺以外のだれにも悟られることがなく回避される。

その風は、俺の後方から吹いていた。

正確には、小鳥遊小鳥、その掌から。

「ま、間にあつて、よかつたあ……」

そう言ってへなへなと座り込む小鳥遊。

「……よくやつた。小鳥遊。風系統の魔法も使えるんだな」

「えつと、実は風系統が一番得意です。……あつちにいた時は、魔物の皆さんたちから、風みたいに早い小鳥つてことで『隼の魔法使い』って呼ばれてたんですよ。えへへ……」

異世界にもいるのかハヤブサ。いらん豆知識をありがとう。

ぺたんと地面に座り込みつつも、ほめられたのがよほどうれしかったのか、にこにこと微笑む小鳥遊。『ご褒美代わりに何となく頭を撫でてやる。

「わあ……」

わあつてなんだわあつて。頭撫でただけだろ。そんな蕩けそうなほど幸せな顔すんな。俺の方までざきどきしちゃうじやねえか。

「……って、しまった！ あの子は無事か！？」

慌てて振り向いた俺の目に映ったのは、風魔法の衝撃で転んでしまった女の子を介抱しているトラックから降りた運ちゃん。……やがて一人の間に何らかの話がまとまつたのか、女の子はトラックの助手席に乗り込み、運ちゃんはハンドルを握る。……恐らく念の為に病院にでも行くのである。

……なるほど。一度あることはサンダーマン。砂男だ。いや意味不明。

明。

俺はいまだに座り込んだまま呆けている小鳥遊を見下ろす。

つまり、こいつだ。こいつが全ての原因だ。

多分、本人にその気はない。なこと思つ。ただ、溢れんばかりの俺への想いが、俺の立てるフラグを結果的に片つ端からへし折つていくのだ。恐らく、無意識に。

「……上等じやねえか……」

めらり。そんな音を立てて俺の中の『ハーレム魂』に火が灯る。

そつちが凄腕のフラグブレイカー……そうだな。異界での二つの名をもじって『隼のフラグブレイカー』とでも呼ばせてもらおうか……だとしても、俺だつて捨てたもんじやない。自称『一級フラグ建築士』である俺と、小鳥遊、お前のその力。

じゅらが上か、白黒つけさせてもらおうか……。

静かに闘志を燃やす俺と、そんな俺が無意識に頭を撫でまわしているせいで、魂が抜けかけてしまっている小鳥遊。……そんな俺たちは時が止まったようにその場に立ちぬくし……。

その日、学校に遅刻した。

一級フランク建築士 VS 隼のフランクフレイカー（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています

「……すいません。山田です。遅刻しました」

……『ハーレム機能』不調の理由と小鳥遊の正体に気がついた俺が鬪志を燃やしていた時間は結構長かったようで（あとついでに小鳥遊の魂が抜けていた時間も）、結局、俺たち二人はホームルームの時間に間に合わず遅刻してしまった。

不幸中の幸いだつたことは、今日の一時限目がロングホームルームだつたこと。ロングホームルームは各クラスの担任が教壇に立つので、つまり。

「あら。山田君。先生心配したわよお！……あ。小鳥遊さんも遅刻だったのね。まあいいわ。一人とも席について」

……「うう」とだ。『ハーレム機能』がばっちりかかっている菊池先生（二十七歳。独身）は俺に甘いのでお咎めなしで済んだ。……それはいいけど、菊池先生？ 小鳥遊の扱いがあんまりな気がしますぜ？ ついでに、小鳥遊。遅刻したことに気付かれないつて、お前普段どれだけ影が薄いんだよ。

「ういの」

朝から激しくS A N値が下がる展開が続いたため、席に着くなり溜息が出る俺。そんな俺に小声で話しかけてくるお隣さん。美鈴。席まで近いとか、腐れ縁にも程がある。

「……どうしたのよ。あんたが遅刻つて珍しいじゃない」

ぱつちは田立つことを嫌うため、基本的にルールを守る。少し前までの俺もそうだったし、最近はフラグ乱立防止のため更に早起きだつたから、確かに遅刻は珍しい。

「いやまあ。いろいろあつてな……」

思わず遠い目をしてしまつ。イベント盛りだくさんの朝だつた。

うん。

「ふうん……。それって、小鳥ちゃんに関係あることなの？」

「……何でそう思う？」

「せりやーつしょに遅刻してくればそう思うしょ。それに……」

そう言いつつ、美鈴がちらりと田線を上げる。つられてそちらを見ると、何やら拳動不審な小動物 小鳥遊と田が合つ。慌てて視線を逸らす小鳥遊。

「わっ起きからりずっと晴樹を気にしてゐるみたい。……何があったのよ

?」「

「何つて言われてもなあ……」

むしろ俺が聞きたい。俺、昨日『友達から』って言つたよなあ…

…?

「昨日も言つたけど、ああいう大人しい子ほど危ないんだからね。手作りチョコに何か混ぜられたり、家の前で待たれたり、あんたに近づく女の子を排除したりとかしかねないんだから。そういう前にちゃんとしておきなさいよ」

先生。うちの幼馴染がチートでピンポイントな千里眼の持ち主です。

あともうそれ全部体験済みです。かなり手遅れです。女つて怖い。お前も小鳥遊も。

「ちやんと……ねえ」

俺はもう一度小鳥遊を見る。

……俺の視線に気がついた小鳥遊が、小さく控え目に、指先を振つていた。

「さあ。今日のロングホームルームは月一回の恒例席替えタイムですよー！」

「いえーい！ とノリのいい何人かの生徒たちが応えた。

何がそんなに楽しいんだお前ら。……いや、楽しいんだろうな。学校生活を満喫しているお前らにとつて席替えは重要なイベントの一つなんだろうよ。俺たちぼっちにとつてはせいぜい「後ろの方がいいな」とか「日当たりいいほうがいいな」くらいしか希望はないけどさ。

……と、先週までの俺ならそう思つたろう。

今は別の意味でどこでもいい。なぜなら俺には無敵の『ハーレム機能』がついている。隣がどんな女子であれ、一瞬でフラグを立てることが可能だからだ。

俺はのんびりと担任の用意した席替え用クジに並ぶクラスメイトたちの最後尾につく。……と思つたら違つた。後ろにちっこいのがいた。小鳥遊だ。

「…………晴樹くんの近くになれますよう」と晴樹くんの近くになれます
「…………晴樹くんの近くになれますよう」

「…………おこ小鳥遊。田立つからひさひさひして俺の名前呪文のよつに連
呼すんな

怖いわ。

「ひやー！…………あ、でもきっと田立ちませんよ、多分…………」「
なんでだよ？…………まさかまた隠密結界でも使ってるのか？　人
前で魔法使うのはやめとけとあれほど」「違いますよ。…………だって、ほら

そう言つて小鳥遊が指さしたのは女子の一群。何やら大騒ぎして
いる。

「山田君の鱗を！　お願ひ神様！」

「まだー　やまだー　やまだー…………」

「山田晴樹！　山田晴樹の近くを一枚よろしく！」

「やつまつだつ！　やつまつだつ！」

「山田君が教卓の真ん前になりますよ。…………」

「…………」。こうして担任特権で

……。

……

「あの山田祭り。山田特売日か？」
「ちょっと君たち怖いんですけど？」　あと約一名、生徒じゃない大

何

人の女性の声が混じつているよつたな氣もしましたが、俺の勘違いですかね菊池先生？

異様な教室の状況に慄いているつむぎ、くじ引きは俺の番になる。その瞬間、教室は静寂に包まれ、俺の一挙一足にクラスメイト全て（プラス大人気ない大人一名）の視線が集まる。その有様は、まるで年末恒例の異種格闘技トーナメント抽選会場のよう。もちろん俺の立場は大本命選手。俺の引く一枚に、このクラスの女子の思惑が何重にも絡まる。

「クリ。

その雰囲気に呑まれた俺は箱の中から一枚のくじを取り出し、何となくやらなくてはいけないよつたな、そんな義務感に駆られ、そのクジのナンバーを読み上げる。

「や、山田晴樹。十一番」

「つおおおおおおおおおおおおおお……」

「十一番！？」ってことは隣は五番と十七番ね！」「外れたわ！」「五番ありませんかー。五番買いますよー」「納得できません！ やり直しを要求しますー」「やり直し要求多数により再実施はありね……。いっそもう山田君の席は教卓前の指定席に、いつん、この際だから教卓を席にしてしまつのも……」「

うん。もう一度言ひ。お前ら怖い。

俺の隣の席を売るな買'な。ダフ屋は違法行為だ。ちなみに幾ら出す気だ？

あと菊池先生はもう少し自重してください。大人なんだから。

一部女子生徒（プラスどうしようもない大人一名）によるクジの再実施が叫ばれたが、この展開に呆れている男子生徒たちが率先して民族大移動を始めると、やがて諦めたように女子も動き出す。…すまん。男子生徒の諸君。俺も君らの立場なら呆れる。というかむしろ怒る。それどころか呪いすらしたかもしね。比較的大人しい男子ばかりのクラスで良かつたと心からそう思う。

窓際最前列から一、二と続き、廊下側最後尾の三十六で終わるこの順番、つまり俺の席は窓際から一列目、後ろから一番目、なかなかいいポジションだ。

「俺の席はここか。……一ヶ月よろしくな。お隣さん」
「ええ。『また』一ヶ月よろしく。お隣さん」

右隣にいたのは見慣れたといつよりもはや見飽きた顔。美鈴。腐れ縁もここまで来るとすごい。もう鎖縁と表現を変えるべき。ま、気心が知れているってことではある意味よかつたのかもしれないけどな。

「で、左隣は……つと」

反対側に振り向いた俺は、ふわりと爽やかな柑橘系の香りに包ま

れる。

「、これは、まさか……！」

「一ヶ月、よろしくね山田君。いい席取れてよかつたー」
そう言つて元気と微笑んだこの天使。いや違う。長谷川佐代子さん。

「……神様……！」

俺は思わず胸の前で十字を切る。いや別にクリスチャンって訳ではない。

それぐらい、うれしかったのだ。長谷川さんの隣が。

クラスでも立つ方じやない。でもきっと密かなファンは多いくらいだ。

思う。

綺麗に切り揃えられた前髪。でもそのさらさらの髪は実は腰に届くほど長く艶やかで。ちょっとたれ目がちな瞳と小さな口が上品さを醸し出し、それでいて常に笑顔で周囲に優しい雰囲気を振りまく。

何より。

『ハーレム機能』を手に入れる前の、凶悪な俺の目を避けることなくまっすぐ見つめ、他のクラスメイトたちに対する態度と一切変えることなく接してくれた彼女。それが当時の俺にとってどれほどうれしかったことか……。

「……山田君。山田くーん。おーい
「は？」

危ない。幸せの余り思わずトリップしてしまった。もう異世界には用はないのに。

「…………」
「…………」

クールに行こうぜクールに。

「はーい。……やー、実はこの席売つてくれって言われてたんだけどねー。口当たりいにし、やめとこてよかつたよー」

そう言つて陽だまりの猫のように田を細める長谷川さん。『俺の隣で良かつた』なんて、そこまで言つてくれる」とまでは期待しない。……それに、今の俺には『ハーレム機能』がついている。この力があれば、すぐに長谷川さんとも仲良く……。

つんつん。

「ん? なんだ?」

控え目に背中をつつかれる感触に、俺は振り返つて 絶句した。

そこにいたのは、長い前髪では隠しきれないほど瞳を輝かせた小鳥遊小鳥。

俺には小鳥遊がうれしさのあまり力一杯振り回している尻尾の幻想ら見える。何でお前そんなに子犬っぽいんだよ。お前鳥だろ。鳥類だろ。隼なんだろ。

残念。小鳥遊さんは人間でした。だから日本語を話します。小さな声で。

「やつた。やりましたよ晴樹くん。お隣にはなれませんでしたけど後ろです」

「俺の後ろに立つな

「無意識に撃つちまうから。

「授業中ずっと背中を見つめています」

「黒板見ろ

「俺の背中に穴が開くから。

「じゃあ語りかけます」

「ノートとれ

俺の背中に呪文喰くんじゃねえ。何か湧いて出てきたらどうする?

小鳥遊の発言一つ一つにダメ出しをする俺。でも小鳥遊の笑顔は崩れない。何だこいつ? やっぱりMなのか? 普通ここまで言われたら心折れないか?

「えへへ……なんか、いいですね。こうこうの

「お前やつぱりM……。つと。じゃない。……一体、何がいいんだ

?」「か、会話のキャッチボール?

「……

……その時俺の脳内には、俺が力一杯、明後日の方に向へ投げつけるフリスビーを全力疾走でうれしそうに追いかける子犬の姿が浮かんだ。……うん。ぴったりだ。

「ま、お前が楽しいのならそれでいいや。……くれぐれも言つておくけど、学校で魔法使うなよ。問題起こすなよ。俺に迷惑かけるなよ。わかったな

「はいっ!」

声は聞こえていないだろうが、そんなやり取りをする俺たちを興味深げに見つめる美鈴。……うーん。こいつ鋭いからなあ。千里眼

だし。気をつけないと……

ほんと、何もないことを祈るつ……。

往々にして、神様というのは案外性格が悪いものである。彼らは、真剣な願いであればあるほど、叶えてはくれない。

俺の真摯な願いは、早くも次の授業で裏切られる事になる。

カリカリカリ……。

鉛筆を走らせる音だけが、静かな教室に響く。

一時間目。数学の授業は小テストだった。

背後に不安を抱える俺にとって、ディスカッションをしろとか言われる授業よりテストのほうが、むしろ今は都合がいい。

「あつ……」

小さな声が隣から聞こえる。そつとそつちを見ると、長谷川さんが消しゴムを落とした模様。それはこころいろ転がり俺の足元へ。

……やるじやねえか『ハーレム機能』。ちょっと控え目なフラグだが、つかみとしてはむしろこのへりこへりうびっこ。

俺は数学担当の森先生に気付かれないと、そつと屈んで消しゴムを取るつとする。

「あ……」

もう一度、先程と同じ声。違つたのは発せられた位置。それは驚くほどすぐそばから聞こえた。具体的には、互いの吐息が顔にかかるくらいの近さから。

消しゴムを握つた俺の手は、柔らかく華奢な長谷川さんの手を掴んでいた。……俺に気を使って自分でとづいたのである。目の前に、俺と同じく屈みこんだ長谷川さんの、綺麗な白い顔がある。

「……」

俺は無音で叫び声をあげる。我ながら器用だと思つ。その表情に驚く長谷川さんは、しかし、すぐにいつものよつて優しく微笑み、そつと人差し指を立てて自分の口に充てる。

「しーっ……ねつ？」

「きゅーん。

撃ち抜かれた。いや、もう木つ端みじんに打ち碎かれた。おいでだらうそこの天使。なんでそんなに可愛いんだよちくしょう。ついでに神様。『ハーレム機能』をありがとう。また何かあつたら呼んでください。いつでも馳せ参ります。

……しかし、幸せな時間は長くは続かない。

キンというその微かな音。それに気がついた人は他にもいたかもしれない。しかし、その音の正確な意味を知るのはこの世でただ一人。いや一人だけだ。

その音は『向こう』でよく聞いた音。……すなわち、魔法の起動音。

慌てて目線を上げる。ちょっとだけ悲しげな表情をした小鳥遊。その視線は握りあつた俺と長谷川さんの手に固定されており、自身の発動する魔法に気が付いていない。

『「！」、「めんなさい！ 私、まだ魔法に慣れてなくって……。」
か、感情が高ぶつたりすると勝手に攻撃魔法とかが発動しちゃって
……！』

昨日の放課後、小鳥遊の言っていた言葉が脳裏によみがえる。

まずい。まずいまずいまずいまずい、まずい！！

命の危険もさることながら、このまま魔法が発動したら小鳥遊の正体がばれる。

現代社会に登場した魔法使いがどんな運命をたどるか、どう考えても悲惨な未来しか見えない。国に捕まり実験動物扱いとか、さすがにかわいそうだろ！

……気がついた時には体が勝手に動いていた。

「小鳥遊！」「こ」がわからん！ 教えてくれーーー！」
「きやつー！」

振り向きざまにそう叫びつつ、小鳥遊の肩を押さえる俺。いきなりの事に驚いた小鳥遊から、無意識に発動しかかっていた魔法の気配が消える。よかつた間にあつた！

「おい小鳥遊。お前今魔法を……」

「え、あ、ああ！？」

「……つたく。仕方のないやつだなお前は」

「……仕方のないやつなのは、お前だ。山田」

「くつ？」

振り返るとそこには、鬼の表情をした森先生。わお。

「先生、教師生活は結構長いが、これほど堂々としたカンニングを見たのはこれが初めてだ。……何が、反論はあるか？」

「……あー、えー、はい。すいませんでした。全面的に俺が悪いです」

「ではこのテスト、お前の答案は没収。後日、補習で再実施ということでいいな」

「はい。もう先生のおっしゃるままに……」

おかしいなあ。俺、先生を含めたクラス全員の命の恩人のはずなんだけどなあ。

「とりあえず、廊下に立つてなさい」

「はい」

「すゞ」と廊下へと旅立つ俺に向か、何度も何度も涙目で頭を下げる小鳥遊。

……ま、いいよ。

さすがに鳥類魔物曰イヌ科の小鳥遊とはいって、実験動物にされるのを黙つて見ていたら夢見が悪いし。だからこれはお前のためじゃない、今後の俺の安眠の為にしたことだ。そんなに気にするな。……でも。でもな。そんな些細なことより許せんことがある。

無人の廊下に出た俺は、一人、魂の叫びをあげる。

「……くつそお!! セつかくいい雰囲気だったのに!! ……おのれ『隼のフラグブレイカー』!! 次は絶対負けないからなああああ!!」

がらつー!

「ひるさいぞ山田!! 廊下じゃなく外に出るか!! ああん??」「す、すいませんでした先生!! 静かにしてます!!」

……とほほ。

俺の隣の席がダフ屋に売買されています（後書き）

12／16、まさかのジャンル別日刊一位……。

信じられないといふか、「まさかドッキリ?」といふのが本音です。読んで頂いた皆さん、本当にありがとうございます。

多くのお気に入りだけではなく、ワールズエンド様から素敵なレビューまでつけて頂き、この作品は幸せ者ですね。

更新がんばります。

もしよろしければ感想が頂けたら、とも、とつてもうれしいです。これからもよろしくお願ひ致します。

米つきバッタといつものを「存じだらうか？」

日本名でショウウリュウバッタというバッタの通称である。こいつが後ろ脚を押さえられると、まるで米をつくように頭を上下に振ることからその名がついた。ちなみにその姿を揶揄してペコペコと頭を下げる人という意味に使つたりする。

何でそんないらん豆知識を披露するかつて？

その理由。それは今、俺の目の前に等身大（よりやや小さく）の米つきバッタがいるからだ。

「『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』……」

授業終了のチャイムと共に、弾丸の「」と廊下にいる俺の元に走り寄り、それはもうすくい勢いで頭を上下に振る小鳥遊。見てるこっちの目が回りそり。

「あー……。もういいから。うん。次から気をつけろ」

本当は全く許してなどいないが、小鳥遊本人の涙目よりも周囲の目が痛いのでそう言つておく。目つきの悪い俺に小柄な小鳥遊が頭を下げる姿は、他人から見たらチンピラが小学生女子相手にカツ上げしているようにしか見えないだろうし。

そういう訳で大変不本意ながら、もつ怒つてないぞーという意味を込め、「」三度軽く小鳥遊の頭をポンポンと叩き、俺は教室に戻る。置いてきぼりを食つた小鳥遊が肩を落としているようだが、ま、

少しほ反省してもうわないと困るし、いいだろ。

「おー。カンニングの現行犯だー。おかえりー」

間延びした声でそう言いつつ、俺を迎えてくれるお隣の天使。いや長谷川さん。

「あれ？ でも山田君、カンニングしなきゃいけないほど成績悪かつたつか？」

俺が答える前に、横から口を出してくるお隣の悪魔。いや美鈴。

「晴樹、数学は悪くないよ。前回のテストでもこのクラスで一位だつたし」

「よくそんな細かいことまで覚えてるな、美鈴」

「うん。だつて一位、私だし」

うわー性格悪いなーいつ。知つてたけど。

「だからカンニングの必要なんてないはずなんだけどね。……たゞがにもう、」まかしあきかないと思いつわよ？ 晴樹。悩みがあるなら言いなさい

「む……」

実は異世界からチート機能持ち帰った小鳥遊さんに迫られてるんです。

……言えねえ……。

「……すまん」

「や。無理には聞かないから言いたくなつたらひづれ」

これが美鈴の数少ない美点の一つ。ここには俺に対して踏み込み

過ぎることがない。なんだかんだと世話を焼きたがるが、ある一線を超えることはない。多分、この絶妙な間合いを維持できるからこそ、俺と美鈴は腐れ縁のままでいられるのだ。その点には、まあ、ほんの少しだけ感謝していなくもない。

「……あんたのことは、まあいいわ。でも『あれ』なんとかしたほうがいいわよ」

俺は美鈴の視線に合わせて『あれ』とやらを見る。……小鳥遊が掃除用具入れのロッカーとお話をしていた。……大丈夫かあいつ？ どうでもいいけど、隅っこが似合つなあ。小鳥遊。

「よく言ひでしょ？ 『ペットを飼うからにはちゃんと世話をしなさい』って。あんた、飼い主として何とかしなさい」「俺も結構ひどこ」と言ひほりだけど、お前には負ける。あと俺は飼い主じゃねえ」

友達をペット扱いするなよ。そりゃ確かに小鳥遊は小動物系だけじゃ。

「……ま、毎休みにでも話しておくよ。ありがとな。美鈴」

しかし、この日、『小鳥遊小鳥と語り合ひの毎休み』は来なかつたのである。

四時限目。相変わらず雑談の多い日本史の時間に、それは起きた。

「あー。次のページ。小鳥遊さん。読んでください」
田中先生の「」括名は小鳥遊小鳥さん。

「……ん？」

返事がない。ただの……ではなく。どうした小鳥遊？ 今度は机とお話をすることに夢中で描かれて気がつかないのか？ 仕方ないな。

「おー、小鳥遊。描かれてる描かれてる。五十一ページから……」
振り向いた俺はそこで言葉に詰まる。前髪に隠れていてわかりにくいが、小鳥遊の顔色が悪い。悪いといふか白い。え？ どうした小鳥遊？ 机にひどいこと言われて傷ついたのか？ チビとか小動物とM体質とか。

「あ、ごめんなさい。晴樹くん……。五十一ページ、ですね……」

「あ、おこ。顔色悪いぞ？ 平氣か

「だいじょぶですよ。だいじょぶ……」

バタン！

「うおー！」

無理して立ち上がりとした小鳥遊が前のめりに倒れる。つままり俺の方へ。

反射的に受け止めた俺は、その想像以上の軽さと細さに驚く。

「た、小鳥遊さん！ 山田君！ 平氣かね！？」

「お、俺は平氣です田中先生。でも小鳥遊が……」

完全にくたつとしている。おかしいのは顔色だけじゃない。なん

か変な汗をかいてるし、呼吸も早い気がする。

「おい。小鳥遊！　おいー？」

「ん……。『めんなさい。晴樹くん。なんか、くらべりして……』
意識はあるみたいだ。一安心……はできないよな。仮にも女の子
だし。

「田中先生。小鳥遊、体調悪いみたいで。このまま保健室行つて
きます」

さう言って俺は器用に体を反転させ、小鳥遊を背負う。……うわ、
やっぱり軽い！　これ本当に俺と同い年の人間の体かよ。女体の神
秘だわ。

……「こでドラマや映画なら『お姫様抱っこ』とやらをしていく
のだろうが、さすがにそれは……ねえ。いや、そんなこと考えてる
場合じゃない。しつかりしろ俺。

「山田君。任せました。あとで担任に報告もお願いします
」「了解しました。行つてきます」

「……疲れによる貧血。一、二時間寝てれば歩けるようになる。
以上

そう男前に断言する人の人。擁護の吉田先生。眼鏡に白衣の美人
教諭。

「言いいきりますねえ。ホントに大丈夫なんですか？」

「私の言つことを疑うのか？ ああん？」

「滅相もございません失礼しました！」

この吉田先生に『ハーレム機能』が通用しない理由。それは極めてシンプル。

俺なんかより段違いに怖いのだ。この人の目。俺がチンピラクラスだとしたら吉田先生はもう完全に本職。ヤの付く職の人しか見えない。ヤート運輸の人ではないぞ。

俺の『ハーレム機能』は俺を嫌い避ける女性にしか通じない。つまり俺を恐れないし、嫌つてもいい、というか歯牙にもかけていない吉田先生には全く通じないのだ。

「ま、心配ならあとで様子を身に来い。……ほら、チャイムが鳴つた。ぐずぐずしてると昼飯食い損ねるぞ？」

「ん……。そうですね。じゃあ俺は戻ります。失礼しました」

「おひ。こいつも動けるようになつたら教室に戻す。担任にもそう伝えておいてくれ」

「イエッサー、ボス」

しかし小鳥遊は、昼休みが終わり、午後の授業が全て終わっても、教室に戻つてくることはなかつた。

「……はい。晴樹。これ」

西口差し込む放課後。考え込む俺の前にカバンと子犬模様の巾着

袋が置かれる。

「なんだこれ？ 荷物もちか？ 僕まだジャンケンしないんだけ
ど？」

「小学生じゃあるまいし……。それ、小鳥ちやんの。行くんでしょ
？ 保健室」

「待て美鈴。なぜ俺が保健室なんかに」

「顔に書いてある。『小鳥遊が気になる。でもどうしよう。行こう
かなやめようかな』。……他の人はだましても、この私だけはだま
せないよ。晴樹」「

降参。

「一時間田の事があるからな。小鳥遊も俺と顔合わせづらこんじや
ないかと思ってる……って言つたら、これは『逃げ』かな？」
「逃げ、だね。……ま、いいわ。そんな迷った顔見せるくらいなら
今日はやめておいたほうがいいかもね。私が届けてあげ……」

そう言いつつ荷物を持ち上げた美鈴の声が止まる。何だ？

「……と、思つたけどやめた。やつぱり晴樹。あんたがいくべき。
じゃあ私は帰るから、あとはよろしく。逃げるなよ。……あ。あ
とこれ。あげる。飲みかけだけど」

そう言つて渡されたのはペットボトルのお茶。……なんだこれ？
意味不明なんですけど美鈴さん。お茶でも飲んで落ちつけって意
味か？

「どういつ意味だこれ……？ つて！ お、おい。美鈴！」

俺の制止の声に振り向きもせず、ひらひらーと手を振つて行ってしまう美鈴。意味がわからん。いいじゃんカバンくらい届けてやれよな。冷たい奴め。

仕方なく一人分の荷物を手に保健室に向かう。ほんと、今日は厄日だ……。

「失礼しまーっす。……あれ？ 先生いないのか……。おーい小鳥遊ー。少しばは体調戻ったかー？」
荷物持つてきてやつたぞー」

わざわざ大声で言うのは、ベッドに横たわる女性に対する礼儀だ。もし衣類が乱れてたとしても、この声を聞いて正せる時間がとれるだろ？ うん。俺マジ紳士。あれだよ。無神経にカーテン開けたら、着替え中の美少女が「きやつ！」って悲鳴を上げるとか、そんなのは一流ハーレム師のやることなのさ。

「あ……は、晴樹くん！？ 『』ごめんなさいまた迷惑を」「いいから。友達だろ？ 気にすんな」

意識的に『友達』に力を入れてみる。効果、あるのかなあ？

「ほんとに私ダメダメで……。泣けてきます……」

俺の知る限り小鳥遊。お前は人生の半分近くを涙目で過ごしてい るような気がするんだが？ ま、それはどうでもいい。俺の人生じ ゃないし。

「で、もう平気なのか？ 体調？」

「は、はい。ぐつすり寝たので……。寝不足で倒れるなんて恥ずかしい……」

「そりか寝不足だったのか。そりや寝れば治るわな……って、おいノリ突つ込みつて難しい。芸人さんつて大変だ。……ではなく。

「人を散々心配させといて寝不足だあ！？ おいこら小鳥遊！」

俺はベッドに横たわる小動物を睨みつける。前髪のカーテンをも貫くその眼光に怯え、もぞもぞと布団に潜り込む小鳥遊。

「じ、実は、この二日ほど、あんまり寝てなくて……」「めんなさい」「あ、そっか。すまん。異世界からこっちに帰つて来たばかりだもんな。そりや向こうの事も魔王の事も気になるだろうし、寝れなくとも仕方ないか」

意外に纖細なんだなあこいつも。怒鳴つたりして悪かつたよ。

「一日前までは『じつひって晴樹くんに告白しようかー』って考えてたら眠れなくて、昨日は『ついに告白しちゃつた……』って思い返してたら寝れないし……で」

「何でお前の頭ん中は晴樹くんしかいねえんだよ！ 晴樹ハーレムかよ！ この鳥頭が！ あっちの世界の魔王とその一味に謝れ！ ついでに俺にも！」

「『ごめんなさい魔王さん。』めんなさい魔物さん。『めんなさい晴樹くん！』

律儀な奴め。あと魔王魔物と同列で俺に謝るな。なんか俺まで魔王の仲間みたいじゃねえか。俺、勇者だぞ一応。何もしなかつた

けど。風邪ウイルス万歳。

「……まつたく。もういい。俺は帰る。小鳥遊は念のためもう少し休んでろよ」

心配して損したわ。寝不足程度なら一人で帰れるだろ。

そう考えつつベッドに小鳥遊の荷物を置こうとして、うつかり巾着の紐を引っかけてしまう。子犬柄っていうのがこいつらしい。……と。中は見ちゃいかんよな。女の子の秘密のブツとか出てきたら気まずいし。

しかし、俺は見てしまった。入っていたものはそんなブツではなく……。

その巾着の中身。ピンクの小さい弁当箱と、それと比べるとやたらと大きい、明らかに男性用とわかるもつ一つの弁当箱。

……その意味を理解し、思わず固まってしまった俺。そして、黙り込んでしまった俺が気になつたのか恐る恐る布団から顔を出す小鳥遊。

「あつ……」

「あ、その、悪い。勝手に見るつもりはなかったんだ。なんか、こう、紐がベッドの柱に引っかかって……」

しぶりやぶりになる俺を見つめ、やがて寂しそうに微笑む小鳥遊。

「あはは……。それ。それも寝不足の原因なんですね。……晴樹くん、何が好きかなーとか、卵焼きは甘いほうがいいのかなーとか、いつしょにお昼とか幸せだなーとか、いろいろ考えてたら、何かすっしゃべ時間たつのが早くつて……」

「…………」

「でも、やっぱりダメですね私。せっかく作ってきても、肝心のお昼の時間にぐーすか寝ちゃうなんて。笑っちゃいますよね。バカですよねえ」

「うん。お前はバカだ。こんなハーレムが夢とか本氣で言つてる男にそこまで惚れてしまつたお前はバカだ。……でも、俺は笑わない。笑えるか。」

「……よこせ」
「くつ？」
「それ、よこせ。あと箸も」
「は、はいっ！ どうぞっ！」
「しゅぱー！ そんな効果音がつきそつた勢いで箸と弁当箱が差し出される。

「お前も食え。昼、ぐーすか寝てて食つてないんだろっ。」

「え、でもここ保健室……」

「いいから！」

「は、はいい！ ……あ、でも飲み物が……」

どん。

「お茶でいいだろ？ 紙コップなら薬飲むとき用のがあるしな」「は、はあ……。用意周到なんですね……」

俺の、チートでピンポイントな千里眼の持ち主で、お節介な幼馴染が、な。

「いただきます」
「い、いただきます」

「……小鳥遊。揚げ物にはソースだろ？」
「え？ うちはマヨネーズですよ？」
「このマヨラーが。ブルドック様とオタフク様に謝れ
「マ、マヨネーズだつておいしいのに……」
「明日もマヨネーズかけの揚げ物が出たら残すぞ」
「そ、そんなに嫌がらなくとも……って。え？ 明日？」
「もう一度言おうか？ 明日もマヨネーズかけの」「
「は、はいっ！ 今日、帰りに買います！ ソース！ 各種！ 箱
で大人買いします！ 買い占めます！ そして明日のおかずは原色
が見えないほどソースまみれにしてきます！」
「それはやめる。『高血圧で早く逝け』って意思表示かと思つちま
うから」

「ク」「クと頷く小鳥遊。

「……心配だから監視する。メシ食つたらスーパー行くぞ。お前が
ちゃんとソースを買って帰るか不安だからな。飼い主としてきちんと
と見張る義務がある」

「か、飼い主って……。あと、さすがにソースくらい一人で買えま
す……え？ あ、あれ？ それってもしかして送つてくれるって」

「その先を口にしたら今すぐ俺は帰るからな。一人で

慌てて口を両手で押さえる小鳥遊。オーバーアクションなやつだ。

……ま、あれだ。食いものには罪はない。

だから、今日は負けてやるよ。『隼のフラグブレイカー』

明日は容赦しないからな。『ハーレム機能』の真の力、見せ付けてやる。

「……は、晴樹くん、晴樹くん」

「なんだ？」

復讐に燃える俺に小声で話しかける小鳥遊。その手にはフォークに刺したタコさんワインナーが……。

「あ、あーん……」

「するかボケえ！ 調子に乗んなこの鳥類が！ こんな保健室にいられるか！ 僕はもう帰るぞ！」

「あ！ 「冗談です」ごめんなさい！ 待って！ 帰らないで！ おいてかないでええええ！！」

やつぱりダメだ！ ペットは甘やかすと付け上がる！

明日こそは泣かせてやるからな小鳥遊！ いつも泣いてる気もす

るナビ！　吠え面かかせてやるから覚悟しとこよー。

.....、「うわあつた。

幼馴染は千里眼（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

はじめてのおかいもの……は修羅場

「ここは姫神商店街。

調子に乗った小鳥遊の「あーん」発言により、買い物に付き合つ約束を本気でキャンセルしようとした俺に対し、小鳥遊はその小さな体の一体どこに……と思うようなすごい力でしがみつき、この世の終わりが来たような悲しい目で見上げてきた。

……あれだ。子犬のしつけで「お預け！」を教えようとした飼い主が、いざやつてみたらその子犬のあまりに切なげな表情に負けてしまつた……。そんな感じ。

結局、渋々ながら買い物に付き合つ俺は、多分、将来ペットブリーダーにはなれないと思つ。なる気も無いけどな。俺の夢はハーレム王だし。

「……な、なんか、すごいですよね。ほんと」「なにがだよ？」

「え、その……晴樹くんとお買い物すると節約になるなあ……って」

しみじじみとそつそつ呟く小鳥遊のマイバック（子犬柄）は、溢れんばかりの食材でぱんぱんだ。大根一本はいい。切り売りとかより新鮮そうだし。……白菜丸ごと一個、ネギが3本……小鳥遊家は今夜

はお鍋だなきつと。……「ンジン2本、ゴボウが5本……混ぜご飯の具としては最適だな。うん。……しかし二ンニク20個。カイワレ4パック、ナス6パック……」これらはどう処理するのだろう?特に二ンニク。窓から吊るして魔除けにでもするのだろうか?異世界の仲間たちやミシルちゃんが悲しむぞ?

当然、小さな小鳥遊の小さなマイバック(子犬柄……が限界まで詰め込まれた野菜のせいで引き伸ばされブルドック柄化している)にそんな大量の野菜類が収納しきれるわけは無く、大変に不本意ながら俺もその一部を持つ羽目になる。

「あ、あの、すいません。荷物持ちさせちゃって……」

「……そう思うならなぜこんなに買い込む? それとも小鳥遊家はTVが取材に来るような大家族なのか?」

「うちはお母さんと私の二人暮らしです。お父さんは単身赴任で海外です」

「そりや寂しいな。……おいままで。一人暮らしでこの量つて……?」「だ、だつてそれは……」

「あっ! 小鳥ちゃん! 今日は鶏肉のいいのが入ってるよー。買つていきなよ! ……あれ? その人は彼氏かい?」

「あ。お肉屋のおばちゃん。こんばんは。……この人は、お友達、の、晴樹くんです」

『お友達』のあたりで少し言葉に詰まっていたが、気が付かなかつたことにする。

「へえ、そりゃうかにそりゃうかい……いやあ、いい男だねえ！おばちゃん気に入つた！よし、今日の特売品のこの上ロース、十円でいいやー、もってきなー、お兄ちゃん！」

「じゃ、十巴ー？」 ありがとうございますおばちゃんー。頂きます

「いやまた小鳥遊！ これ以上まだ買つのか！ やつぱりイヌ科なのかお前!!？」

「だつて十円です！ 買います！ 買わざにはいられません！」

「そ、そのかわり 小鳥ちゃん…… またそのお友達 連れてくる
んだよ……」

「はー！ 任せてくれださー。」

てめえ小鳥遊！ 勝手に俺を売るな！ あと肉屋のおばちゃん！

心配しなくてお腹は俺一人で支えます。素敵なおなたに会

「...」

「ああー、お肉屋の娘が恋する女の顔になつてまー。」

……………そう。 そうなのだ。 今の俺は『ハーレム機能』全開中。

わいきからす」と、どの店に入つても店番が女性であればこの調子で、値引きとおまけのフルコース。また小鳥遊が『値引き』とか『おまけ』とかいう言葉に弱く、勧められるもの全部受け取るのでこの有様。……しかし上口ース十円つて何の『冗談』だ。怪しげな生き物の肉ではないだろうな？ ミシリちゃんとかの。明日の弁当には注意したほうがいいかもしれん。

しかし。

「……なあ、小鳥遊。お前、気にならないの？」

「はい？ 何がですか？」

「なについて……あー、やつぱいにや

「？？？」

……普通や、自分が好きな相手に他の女性が色目使つてゐるのを見たら気にならないか？ 僕、長谷川さんに声かけるナンパ野郎見つけたら呪づか？

「やつぱり男の人とお買いものするのっていいですねえ。荷物持つてもらえるし、何よりその相手が、か、かつこいいと、おまけまでしてもらえますし……えへへ」

「照れるべつになら言つな

小鳥遊さん、超ご機嫌。……何か納得がいかない。こいつには嫉妬とかいう感情が存在しないのかもなあ。……試してみるか。

「小鳥遊。ちょっと休憩しないか？ ワックあたりで」

日本中にあるファーストフード『ワック』。正確にはワクドナルド。関西では『ワクド』と呼ぶのが一般的。

「わつく……？ 女性自衛官教育隊のことですか？」

「そりやWACだ！ ここは朝霞じやねえ！ 東部方面混成団は駐屯してねえよ！」

……なんで知つてんだよそんな自衛隊豆知識！ 本気で驚いたわ！
……ああ、この会話に興味を持った人がいるのならばあとでググる

といい。検索ワードは『女性自衛官』な。

え？ なんで俺が知ってるのかつて？ そりゃあんた、軍服着た女性は美しい。それ以上の説明が必要か？ いらんだろ？ いるわけがない。

「あ、ワクドナルド屋さんのことですね」

なんだよワクドナルド屋をいつて。お前は田舎のおばあちゃんか。

「い、いいですけど……。私、あんまり利用したことがないので……」

「へえ。珍しいな今時。ファーストフード嫌いなのか？」

「いえ。そういうわけでは……。ああいうお店つて、女の子一人で入るのって結構勇気がいるんですよ？」

「そういうもんかねえ」

言外にある『私、あんまり友達いないので……』とこう言葉に気がつかないふりをしてあげる俺は優しいと思つ。まあ、こいつも俺と同レベルくらいのぼつちっぽいしなあ。

「で、でも晴樹くんといっしょなうじうじでも行きます！ たとえ異世界でも！」

「いや。俺はもうあっちには行きたくないから。行くならお前ひとりで行け」

「……冷たいです。晴樹くん……」

恨みがましい目で俺を見る小鳥遊を連れ、ワック店内に入る。実際、疲れてはいないが喉が渇いているのだ。

我が幼馴染、美鈴からもうつたお茶。その行為自体には感謝している。が。

そのお茶、えらく濃厚な抹茶風味のお茶で食事のお供には向かなかつた。何しろ飲むことによつてかえつて喉が渴くレベル。その名も『濃い』。お茶。……これを開発販売したメーカーは利益よりも笑いをとることを狙つているとしか思えない。倒産してしまえ。

俺はカウンターの店員を見る。……よし。バイトの女の子、多分女子高生だな。

……狙いは単純。さつきの商店街での買い物では、個人商店中心に回つっていたため、年配の女性とのやり取りばかりだつた。……それゆえ、鈍い小鳥遊では嫉妬心が働くなかつたのかもしれない。だからこいついう店で、自分と同年輩の女の子を俺が口説く姿を見せれば、さすがの小鳥遊でも何らかの反応は示すはず……。

願わくば、『こんな誰にでも声をかけてしまうハーレム男なんて嫌いだわ!』という展開になつてほしい。……それを狙つて、この買い物中ずっと『ハーレム機能』を全開にしているのだ。これで小鳥遊が俺に幻滅してくれなければ、安く大量の食材を手に入れたこいつの一人勝ちになつてしまつ。それは避けたい。

「腹は減つてないよな。飲み物だけでいいか? 小鳥遊?」

「はい。お任せします」

「ん。……すいません。注文いいですか?」

俺はカウンターの女の方に近づく。

「いらっしゃいませー」そこちわー』注文をどうぞー
いかにも『アルバイトです』とこう投げやりな雰囲気の店員さん。
しかし。

「ウーロン茶ふたつ。以上で」
「はい。ありがとうございます……こ、ます？」

みると、さすがに赤くなる店員さん。……ハーレム機能、発動。

「あ、あのー『じこっしょに私はいかがですか！？』
「えーと、どうしようかなあ」

「今なら『可愛こわ・た・し』キャンペーン中で無料でついてきますけどー！？」
「じゃあひとつお願こー」
「ありがとうござりますー。こちらでお召し上がりですかー？ それともお持ち帰りますか！？ 制服は着たままのほうがいいですかー？」

さうい勢いで迫つてくる彼女。さらに後ろから別の店員さんも身を乗り出していく。

「お得なセットはいかがでしょー！？ 今なら私も付いてきまーー！」
「おお。じゃあそうしてもらおつかな」
「ちょっとあんたー ひつじんでなさこーー！」
「なによー。あんた彼氏いるじゃないー。この人は私に譲つてよー。」
「あんたは調理担当でしょー！ 後ろでポテトでも揚げてなさこーー！」
「このイモ娘ー！」
「なにをーーー！」

カウンターで取つ組み合いのけんかが始まる。いわゆるひとつ修羅場といつやつである。原因はこの俺。俺が色目を使ったから。……思惑通りとはいえたよと罪悪感が沸く。「めんな店員さん。今度お詫びにお持ち帰りするから許してくれよ。その時は制服着用で頼む。

さあ、この様子を見れば、さすがの小鳥遊でも……。

「は、晴樹くん。見てくださいー。お子様セットのおまけ！ ワンちゃんのぬいぐるみです！ すついじく可愛いですー。」

まつたく見ていなかつた。

「てめえ小鳥遊！ 目を輝かせながら何を見てやがるー！」
「メニュー見てます！ ほらー。百十九種類あるみたいですよ！ 買い止めましょうー！」

「なんだとー？ あこじぎな商売にもほどがあるぞワック！ 小学生の娘さんにコンプリートせがまれるお父さんの立場になつてみろ！ お小遣いいくらあつても足りねえじやないかー……じゃねえええええーーー！」

カウンターの前では怒りの叫び声を上げる俺。カウンターの内側では接客そっちのけで喧嘩している店員たち。まさに阿鼻叫喚。

そして、そんな騒ぎにま田もくれずお子様セシートのメニュー前に張り付く小鳥遊。

……俺の心が、折れた。

さすがにいたたまれず、テイクアウトに変更した俺たち。店員さんたちいじめん。

今は最後の買い物であるソースを求め、スーパー『ニヤオン』に向かう途中。

「……なんか、騒がしいお店でしたねえ」

ちゅうちゅうとウーロン茶を吸う小鳥遊。実に小学生っぽい。

「真の原因はお前なんだけどな……。もういいや。疲れたから直球で聞くぞ？」

「はい？ なんですか？」

「お前さ、俺が他の女の子と仲良くしてても気にならないの？ お前、俺のこと……好き、なんだろ？」

「わあ恥ずかしい。自分で言つとホント恥ずかしい！」

最初、俺の言葉の意味がわからなかつたのか、きょとんとし

ていた小鳥遊は、やがてここにこしては珍しくヒヒと笑つて言った。

「別に気になりませんよ？ だつて晴樹くん、かつこいいし優しいし、女の子に好かれるのは当たり前ですから。……だつて私が好きになつた人ですもの」

……絶句した。

俺の全力の直球が、場外ホームランで打ち返された氣分。

「確かに晴樹くん。最近急にモテるようになつたなあ……とは思つてます。でも、そんなのむしろ遅かつたくらいです。だつてこんなに優しいんですから。……でも、ですね。晴樹くんの魅力に一番最初に気がついたのは私ですからね。……だから、別に平氣ですよ」

……こつは、こつは、こつはもうー。本当にー。ああああ
もーーーーーー

「は、恥ずかしいこと言つてんじゃねえよ！ むらーー。いくぞ！」
「はいー。どこまでもついてきますー！」

『一級フラグ建築士』、山田晴樹、完敗。

……しかし、波乱万丈だった今日は、まだ終わらない。

ラスボスは、スーパー『ニヤオン』で待ち構えていたのだ。

夕方のタイムサービス狙いでごつた返すスーパー『ニヤオン』に足を踏み入れた俺たちに、いつもの間延びした声で話しかけてきたその人物。……彼女の名前は。

「あれー？ 山田君と小鳥ちゃんだあ。一人もお買いものかなー？」

長谷川 佐代子という。

せじゆのおかしもの……は修羅場（後書き）

今回は構成上、ちょっと短めになりました。
ちなみに作中のWACは実在します。

ご意見、感想などが頂けたらうれしいです。

野望の理由

四月。桜舞い散る入学式。

「……ほら。晴樹。いつまでも拗ねてないでさあ……」「ほつといてくれ美鈴……。どうせ俺なんかヤンキーなんだ……」

新しい環境。新しいクラスメイト。俺は期待していた。この西の名門といわれる姫神学園の生徒なら、俺を見た目だけで不良と決め付けずに接してくれるであろうと。

しかし現実は非情である。

出席番号順で隣の席となつた女子には、初対面で「ひつ……」と息を呑まれ、また背後からはひそひそと、「なんでこの学園に不良がいるんだよ……」と咳かれ、あげくのはてには担任ですら、クラスで唯一、俺にだけ名前に『君』ではなく『さん』とつける始末。

やむぐれもしようつるものである。……またその態度がさらりと誤解に拍車をかけてしまう悪循環。もうやだ。引きこもりうかぬ？
凛子画面から出でこないかな。

「あーはいはい。愚痴なら後で聞くからや。とにかくしつちきなさい。先生が四人一組になれってさ。オリエンテーションするそうよ」

……学校の先生と言つのは、時にとても残酷だ。『一人一組になつてー』。この悪魔の言葉に怯えるぼっちは如何に多いかと言つことを、奴らは知らない。

「……俺はいこよ。余り者同士で組むからさ。俺に構つているとお前まで孤立しちまつぞ？だからさつとと行け。気持ちだけ受け取つとくからせ」

「あーもー……。面倒くさい男だなー 晴樹は！」

「そう思つならまつとけ！ いいから早く俺以外と」

その言葉は、春風に乗つてふわりと漂う柑橘系の香りによつて中断される。

「あのー、お話し中すいませーん。まだ四人揃つませんかー？ もしそうなら、良かつたら私も入れて欲しいなー……なーんて」

俺と美鈴は舌戦を中断し発言の主を見る。さらさらの黒髪。愛嬌のあるちよつとたれ目がちのその瞳。そしてその笑顔。まるで春の陽だまりのように優しく暖かい。

「長谷川佐代子つていいますー。やー、我慢できなくてトイレ言つてる間にすっかりグループ作りに出遅れてしまいましてー。仲間に入れてくれたらありがたいなーと」

「あ、うん！ もちろん！ 私は美鈴！ 前田美鈴ね！ で、こいつの田つきと第一印象の悪いのが晴樹！ 山田晴樹！ ようじくー！」

おい美鈴てめえ初対面の女の子に俺のトラウマ暴露すんなー。
そんなこと言つたら、せつかく話しかけてくれたこの子が怯えて

……。

「はあい。」
「あらーそー。美鈴さんに山田君。一年間ようじくねー」

。「…………」。

……あれ？

「…………ね、ねえ？ 長谷川さん？ 变な事聞くようだな？」「…………こと怖くないの？ この晴樹の、特に田と性格」「田はともかく初対面で怖がられるような性格はしてねえよ！」
そんな的確に人の心を傷つけるお前のほうがよっぽどひどい性格だわ！

「んー？ 山田君は怖い人なんですかー？」

「え。い、いやそんなことないと自分では思つけど……。どうだろう？」

「なんで自分のことなのに疑問系なのよ晴樹…………」

仕方ねえだらう美鈴！ 生まれてこの方、お前以外の女の子とこんなにまともに会話したことがねえんだからさー。そら緊張もするわ！

…………真剣な表情の長谷川さんに上から下までじーっと見つめられる。あ、田。田は見ないで。他はともかく田つきは確かに悪いって自覚あるし。だから田は…………。

「別に怖くないですよー？ これから仲良くなさいねえ」

長谷川さん、いや現世に降り立つた天使はそつぬつてもう一度微笑んだ。

俺は長谷川さんに、出会って五分で惚れた。

「よ、よろしくなー 長谷川さんー わあ、さっさと四人組作ろうか！ 僕と長谷川さんと美鈴……。あー！ おにそこのちつちやいの！ お前だお前！ そこの影の薄そなお前！ まだグループ作つてないだろー ひちこによつちー ここ、あと一人で揃うんだ！」

十一月。あちこちに死闘の後が残る異世界。その地に立つ神は言った。

「……お主のおかげでこの世界には平和が戻った。元の世界に戻す前に、心からの礼を言ひた。……どうした？ なぜ泣いておるのじや勇者よ？」

「だ、だって、だって……ヒックヒック」

一日で滅びるなよ魔王軍ー これじゃ俺、何の為にこの世界に来たのかわからんねえよ！

この世界の平和なんてどうでもよかつたんだよ！ 僕は俺に冷たい現実世界に絶望して、俺のことが大好きなあの子たちといちゃつくためにここに来たのにーー

ああ、シンデレラ姫が武骨な女戦士が無口な女魔法使いが貞淑な女神官が可愛い獣娘が俺との別れを嘆き泣きながら手を振っている。帰りたくないよつ……。

「……その涙……われらのために泣いてくれるのか勇者よ……」

ちげえし。

「お主の優しさには感服した。本来、認められぬことだが、元の世界に返す際、何かひとつ願いをかなえてやるとしよう。わたくかな礼じや」

……え！ マジド！ ？ ジヤ、ジヤあ、ジヤあ！

「長谷川佐代子さんがあのことを好きになるようにしてくだせ」

「長谷川……？ ああ。元の世界の女性か。……すまぬ勇者よ。わかれはこの世界の神ゆえ、お前の世界の住人に直接関わることとは適わぬのじや」

ちつ！ 使えねえな神！ 滅びろ！ パルス！ パルスパルスパルス！

「ちくしょう……。やつぱり神なんていないんだ……」

「いやいるし。ここにいるし。お前の目の前にいるし」

神のつくりみが鬱陶しい。口調まで違つじやねえか！ なめんな

！！

「お前の世界にいる者に何かをする事はできぬ。ゆえにこうしたらどうであろう？ ……元の世界に戻す際、ひとつだけそなたに『えた能力を持つたまま帰ることを許そ』う。……勇者よ。何を求める？」

そんなの決まつてこる。

「ハーレム機能を！ 世界中の、俺の事を嫌い、そして避ける全ての女性が、俺のことを好きで好きでたまらなくなるよ！」してくれ！」

……長谷川さん一人だけを手に入れることが出来ないのなら、全世界の女性ごと全てもらってしまえばいいのだ！ 俺自身を『ハーレム機能』に特化させ 現実世界にハーレムを作り上げてやる！ そしていつかそこに100%理想の彼女、すなわち長谷川佐代子さんをも迎え入れるのだ！！

ハーレム王に、俺はなる。

そして、今。現実世界。スーパー『ニヤオン』入口。

「あれー？ 山田君と小鳥ちやんだあ。二人もお買い物のかなー？」

なんという幸運！ 愛しの長谷川さんに偶然出会えるとは！
…あ、いや、ちょっと待て。……あれ？ 二人？ これ下手したら誤解されるんじゃ……。

「あれー？ あれあれあれー？ もしかして私、おじやま虫ー？ はさんで捨てられちゃう感じかなー？」

わよとんと首を傾げ、立てた指を頬にあてる長谷川さん。可愛い
！ じゃなく！ あああやつぱり誤解されてる！ ついでに挟んで
捨てるのは泣き虫とモモンガな！

「ち、ちがうちがう！ 長谷川さん勘違い！ 俺はこのマリナー小
鳥遊にソースの素晴らしさを教えるために……！ なー 小鳥遊！
もうだよな！」

「…………」

「ん？ おい。小鳥遊？ 小鳥遊！」

「あ、はい！ そうですそうです長谷川さん！ 晴樹くんが『一日
だけ待つてくれ。お前に本物のソースというものを見せてやる……』
つて」

「言つてねえよそんなこと…」

どこのゲータラ新聞記者だよ俺は！ 見ろ長谷川さんがひいて…
ひいて？

とにかく歩いて行つた長谷川さんが棚から取つたのは一本のボトル。
なんだ？

「このソースを作つたのは誰だあ！ 女将をよべー！」

「ちよつとまつて長谷川さん！ 作つたのメーカーだから！ 女将
とかじゃないから…」

てへーと笑う海原……ではない。長谷川さん。迫力が足りないよ。
あの料亭の主人は間違つてもそんな可愛い顔で微笑んだりしない。
愛らしさなら圧勝だけど。

「どうかなー？ にてたー？ ものまねー」

「ううん。全然。まつたく」

可愛すぎるのも問題つてことだ。長谷川さんは悪役のマネは出来ない。

「ちえー。残念。……でも、そつか。ただのお買いものなんだね。私、てつきり山田君と小鳥遊さん、デートなのかなーって思っちゃつたよー」

「ないないない」

「まー確かに、デートでスーパーっていうのも……、んー、アリかな?」

「アリなのか? なにすんだよスーパーで?」

「『オススメ! 彼女と廻る試食コーナーの旅!』とかどうかなー?」

「いいの長谷川さん! ? そんな貧乏くさいトートでいいの! ?」

驚愕した俺の突っ込みに、長谷川さんは意外なほど真面目な、ちよつとお姉さんぶつた表情で立てた人さし指を目の前で振りつつ言う。

「わかつてないねえ。山田君はー。……好きな人といっしょなら、どこにいても、何をしてても楽しいのが乙女というものなのさー。あつはつはー」

…………至高の言葉。頂きました。心のメモ帳に付けておきます。うん。

「……で、長谷川さんのまつば買い物なの？」

「うん。私はお母さんとー」

え？ まじで？ ちょっと挨拶とかしあわうかな。「お嬢さんとお付き合こと結婚をせし頂く予定の山田と申します」とか何とか言つたやつ。

「お母さん、今あつちにー」

脳内で長谷川さんの頑固お父さんに向け正座して頭を下げるシンクまで高速展開していた俺は、長谷川さんのその声で我に返り、その指示示す先を見る。

「ん？『タイムセール！ 豚汁無料配布中！』か

広い駐車場の一角。そこに簡易テントを備え付け豚汁の無料配布をしているらしい。言われて気がついたが食欲を誘つ匂いが風に乗つてここまで来ている。

「もうすく飯だからやめよつよー……って言つたんだけどねえー」「あれだ長谷川さん。主婦はほら、『無料』とか『おまけ』って言葉に弱いからな。やつきもこの小鳥遊だつて、もう持ち切れないほどのおまけを……。ん？ 小鳥遊？」

隣にいるはずの小鳥遊が妙に大人しい。反応が鈍いな。おいお前どひし……

「…………！　おい！　小鳥遊！　おい！…」

小鳥遊の瞳から光が消えていた。のっぺりとした漆黒。目だけではない。その表情。一切の感情が削ぎ落したようなその顔。まさか、まさかまさかまさか！！

「おん！－！」

腹に響く轟音が無料配布イベント会場のまづから聞こえた。

「なつ……！」

音の反応した俺が見たもの。それはイベント会場備え付けのコンロから軽く3mは伸びあがった炎の柱。プロパンガスの爆発ではない。テントの外に設置してあるそれはどう見ても無事だ。そもそもあれはプロパンガスの火力じゃありえない。

紅蓮の炎はコンロ上の鍋を吹き飛ばし、テントの布製の屋根を舐めつくり、やがて徐々に『何か』の姿を形成しようとしている。

ギロリ。

そんな音が聞こえた気がした。あの炎、あれには意思がある。その証拠に炎の中に瞳の様なものが見える。現代社会の人間にとつては『目の錯覚』『気のせい』扱いされるだろうが、異世界からの帰還者である俺には、はつきりとそれが認識できる。

あれは、きっと、火の精霊。つまり小鳥遊の召喚魔法が発動していること。

「えつ！　えつ！　なにかなあれ！　ごめん山田君！　私、ちょっとお母さんのところへ行つてくるね！」

「お、おう！　長谷川さん！　気を付けて！」

危険かもしない。止めるべきかもしない。でも俺は『これ』の原因を知っている。長谷川さんの身を案じるならば、今は一刻も早くその原因を何とかするべきだ。

「小鳥遊！　おい小鳥遊！　しつかりしろ！」

肩を掴んで揺さぶる。反応がない。まるで人形を振り回している気分だ。何でだ！？　数学の授業の時はこれで止まつたじゃないか！

……唐突に異世界の事が思い出される。無口な魔法使いが言つていた言葉。

『精霊召喚魔法を使うと、術者はやがてトランス状態になる。外部からの反応に極端に鈍くなり無防備になる。……だから、私が精霊召喚魔法を使う時は、ハルキ、あなたが守つて』

「なんていこつた……。他に手はねえのか？　働け俺の頭！－！」

……次に思い出したのは有名なラノベの一シーン。確か映画にもなったはず。

小鳥遊と同じように無意識で、いや夢の中でだったかな？　とにかく不思議な力を使ってしまったヒロインを正気に戻すのに主人公が使った手は……。

「き、き、き……」

キス……だつた。　やだ照れる。……じゃねえー！

がつと力を入れ小鳥遊の肩を掴む。正面からその小さな顔を見る。その下の方。自然に軽く開かれた唇。今は寒さのせいかちょっと色を失ってるそこ。すげー柔らかそうな……。

『ぐぐり。

で、できるのか俺！？　しちゃうのか僕！？　やるしかないのかオイラ！？

いや待て落ちつけ山田晴樹。これは言わば緊急避難！　ほらあれだよ海で溺れた少女を助けるために人工呼吸するじゃないか！　あれと同じだつて！　命を助けて強制わいせつ罪で訴えられたつて話も聞かないしな！　どうでもいいけど『溺れた少女に人工呼吸したら訴えられました』ってなんか最近のラノベのタイトルっぽいな！将来作家になつたらそんな話書いてみようか！……つてええええ！！　落ちつけ俺！　脱線してる！　混乱するな覚悟決めろ！

「す、すまん小鳥遊。……許せ！」

そう呟くと俺は小鳥遊に顔を近づかる。……うわあ、まつ毛なげえ。肌しろいー。しかもすべすべー。そ、そして膚。や、やわ、やわ、やわらかそうで……。

「……って……！ できるかボケえ……！」

俺はそう叫んで店内に猛ダッシュ。ショーケース内にあつたそれを掴み、レスターんして戻ってくる。結果的に火事場泥棒の万引き状態になっているが、金は後で払う。今は『あれ』を何とかしないと……！

「小鳥遊いい！！！ 田え、覚ませええええええええ……！」

びたん。

その脣ではなく、左右両方のちょっと横。よく伸びそうなその類にそれを押しつける。

一、二、三、四、五……

「……ひゃ、ひゃあああー！ つづつべたいー！ な、なんですか
いつたい！？」

「よつしゃああああああー……！」

おっし！ やつた！ さすがアイスの王様『カリカリ君』！！
伊達にコーラ味とソーダ味はしていない！ 意味わからんねえよ俺！
とにかく成功！ わーい！

反応が無くなるのではない。『極端に鈍くなる』のなりば、
それを上回る刺激を『えでやればいいのだ。例えば、凍るような寒
い冬の夜に、地肌にアイスを押しつけるような……な。

「話はあとだ！ とにかくあれ！ あれお前の仕業だろ！ なんと
かしり！」

「え……。あ！ あ！ あ！ わ、私、私また……」

「反省するのも落ち込むのもあとだ！ 小鳥遊！」

「は、はいっ！」

慌てて手を組み何かの詠唱を始める小鳥遊。

途端にその威力を失い始める火の柱。……それは徐々にその姿を
小さくしていき、やがて消える。……消え去る直前、ある筈のない
瞳に睨まれたような気がしたが、見なかつことにする。

「…………」

……騒動は、終わった。

「……あ。いたいたー。おーい山田ーん小鳥遊ーん

ヤジ馬から抜け出してきた長谷川さんが無言で立む俺たちを見つけ、近寄ってく。無事なよひで向よつた。ああよかつた。

「お母さん、平氣だつた?」

俺の将来の義理の母は。

「うんー。お母さんだけじゃなくてねー、怪我人は一人もいないらしいよー。でも驚いたし、今日はこのまま帰ろうつって。だから、じゃーねー。ふたりともー。またあしたー」

そう言つて小さく手を振る長谷川さん。それに返しつつ、俺は小声で言つ。

「わー……」

びくつ。

俺の言葉に反応する小鳥遊。

「…………」「めんなさい。晴樹くん。あの…………」「めんなさい」

「謝罪はもついい。何度も聞いたからな。ただ、ちゃんと話してもういちど? 時間、平氣か? ……悪いけど、ダメって言われても今口は話すまで帰さないけどな」

なこしきりちま命がかかつてゐる。門限破りへらつては覚悟してもうおへ。

「……はー

そう呟いた小鳥遊は、こつもよつもさりに小さく、髪げに見えた。

「……ほれ。何が好きか知らんからお茶にした。受け取れ」

俺はそう言って、ベンチに座り俯く小鳥遊にペットボトルのお茶を差し出す。『はあっ！ お茶っ！』といつその商品名にはもはや突っ込む氣にもなれない。当然、『濃い。お茶』と同メーカーの商品である。商品名に感嘆符つけるとか、そろそろ本氣でこの会社は開発陣を変えたほうがいい。

「ありがとう……『やー』ます。お金、払います。いくらですか？」
「いいよジユース代くら。……それより一気に飲むなよそれ。力イロ代わりなんだからな。『やー』、寒いし」

……………そつなのだ。『はー』スーパー『ニヤオン』近くの公園。……………
すく、寒い。

『ニヤオン』駐車場は小鳥遊の引き起こした騒動のせいでの警察やら消防やらヤジ馬やらでとても話が出来る状態ではなく、ここに市場所を動かした。

俺も小鳥遊の隣に腰掛け、自分用の缶コーヒーを手に弄びつつ小鳥遊が話しだすのを待つ。

手持無沙汰に、何となく空を見上げる。オリオン座が綺麗だった。

「……ごめん、なさい」

やがて隣から聞こえた声は、余りにも小さく、うつかり聞きもらしそうになつた。

「いやもう、だからな？ 謝るのはいいって。幸い、怪我人も出なかつたし火事になつた訳でもない。……まあ、テントは燃えたけど。保険で何となるだろ。だからさ、俺が聞きたいのはそういうことじゃなく、その……何で、なんだ？」

この『何で』の意味はさすがに鈍い小鳥遊でもわかるだろ。

俺があれほど多くのハーレムフラグを立てても、まったく動じなかつた小鳥遊が、『何で』あの時、感情を露ぶらせて魔法発動に至つたのか？

俺には聞く権利くらいはあるよな。

「……言わないと、ダメですか？」

俯きつつそう問い合わせる小鳥遊。当たり前だ。しかし……。

「どうしても言えない……っていうのなら仕方ないけど……。ああそつか。例えばお前を呼び出した魔王の秘密が絡んでて、言つたら殺されるとか言う事情なら言わなくていいぞ」

何しろ相手は魔王だしな。そういうこともあるだろ。

しかし小鳥遊は力なく首を振る。

「そういうのはありません……。晴樹くん、本気でわかりませんか？ それともいじわるでそう言つてますか？ どちらですか？」

「わかんねーよ。なんだよいじわるつて。人聞きが悪い」「俺がいつもおまえをいじめてるみたいじゃねーか。

やがて静かに、小鳥遊が立ち上がる。

何かを覚悟した表情をして、まっすぐ俺を見て、その小さな口を開ける。

「長谷川さん、が、いたからです。……晴樹くんが好きな、長谷川さんがいたから

……俺の手から缶コーヒーが滑り落ちる。

無人の公園に、カラソンという乾いた音が響いた。

野望の理由（後書き）

「」意見、感想などが頂けたらうれしいです。

続きは本日中に予約投下されます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797z/>

異世界ハーレム彼女の逆襲！

2011年12月21日18時50分発行